(財)広島市歴史科学教育事業団調査報告書　第17集

広島市佐伯区五日市町所在

黒谷遺跡
発掘調査報告

1995・3

財団法人 広島市歴史科学教育事業団

はしがき

黒谷遺跡の所在する広島市佐伯区の石内地区は、平成6（1994）年9月に一般県道原田五日市線（石内バイパス）が開通したほか、広島市が推進する人口10万人規模の「西風新都」(広島西部丘陵都市)建設のための開発工事が現在も進められていることなどから、近年大きな変貌を遂げている地域です。またこれらの開発工事に伴い多くの遺跡が消滅するため、それに先立つ発掘調査が最近盛んに行なわれております。今回報告いたします黒谷遺跡もシティリゾートタウン（現・広島ライセンスパーク）が建設されることから記録保存のため発掘調査を実施しました。

調査の結果、竪穴住居跡、掘立柱建物跡等が確認され、弥生時代後期後葉から古墳時代初頭にかけて営まれた集落跡であることを明らかにすることができました。また土器・鉄器・石製品等が出土しており、石内川流域の古代の人々の生活を知るうえで貴重な資料を得たと思われます。この調査報告書が地域の歴史学習の一助となり、郷土に対する理解と愛着を深めていただくことに役立てば幸いです。最後になりましたが、調査にあたりご指導・ご助言いただきました諸先生方、並びにご協力いただいた調査関係者の皆様方に心からお礼申しあげます。

平成7年3月

財団法人広島市歴史科学教育事業団

例　言

1．本書は、広島市佐伯区五日市町大字石内字黒谷におけるシティリゾートタウン（現：広島ライセンスパーク）建設に伴い、平成６年度に実施した黒谷遺跡の発掘調査報告書である。
2．発掘調査は、株式会社中国そごう都市開発・日本鋼管不動産株式会社共同事業体から委託を受けて、財団法人広島市歴史科学教育事業団が実施した。
3．本書は、I・III－V（１）を越智尚之が、II－IV－V（２）を宮田浩二が執筆し、宮田が編集した。
4．遺構の実測及び写真撮影は、宮田、越智が分担して行った。
5．遺物の実測及び写真撮影は、宮田、越智が分担して行った。
6．図面のトレースは、宮田が行った。
7．本書掲載の航空写真撮影は、スタジオ・ユニに委託した。
8．第１図は、国土地理院発行の５００００分の１地形図「広島」を、第２図は、広島市発行の２５００分の１広島市平面図「Ｎ一５」・「Ｎ－６」をそれぞれ複製したものである。

目　　次

I　はじめに 1
II　位置と環境 3
III　遺構 7
IV　遺物 １３
V　まとめ １９

揮　図　目　次

第１図　黒谷遺跡周辺遺跡分布地図 2
第２図　黒谷遺跡周辺地形図 6
第３図　黒谷遺跡遺構配置図 ２５
第４図　第１・２号住居跡実測図 ２６
第５図　第３・４・５号住居跡実測図 ２７
第６図　第２号住居跡土器・炭化材実測図 ２８
第７図　第１号掘立柱建物跡実測図 ２９
第８図　第２号掘立柱建物跡実測図 ２９
第９図　第１号テラス状遺構実測図 ... ３０
第１０図　第２号テラス状遺構実測図 ... ３１
第１１図　出土土器実測図（１） ３２
第１２図　出土土器実測図（２） ３３
第１３図　出土土器実測図（３ ..... ３４
第１４図　出土土器実測図（４） ３５
第１５図　鉄鏃実測図 ３６
第１６図　砥石実測図 ３６

付　表　目　次

表１　黒谷遺跡出土土器観察表 １５

図　版　目　次

図版１　　黒谷遺跡遠景（調査後・東から・航空写真）
図版２ａ．黒谷遺跡全景（調査前・平尾遺跡から）
　　ｂ．黒谷遺跡全景（調査後・南から・航空写真）
図版３ａ．第１・２号住居跡
　　ｂ．第２号住居跡土器及び炭化材出土状況
図版４ａ．第２号住居跡土器出土状況
　　ｂ．第３・４・５号住居跡
図版５ａ．第３・４・５号住居跡及び第１・２号掘立柱建物跡
　　ｂ．第１・２号掘立柱建物跡
図版６ａ．第１号テラス状遺構
　　ｂ．第２号テラス状遺構
図版７　　黒谷遺跡出土遺物（１）
図版８　　黒谷遺跡出土遺物（２）
図版９　　黒谷遺跡出土遺物（３）
図版１０　黒谷遺跡出土遺物（４）

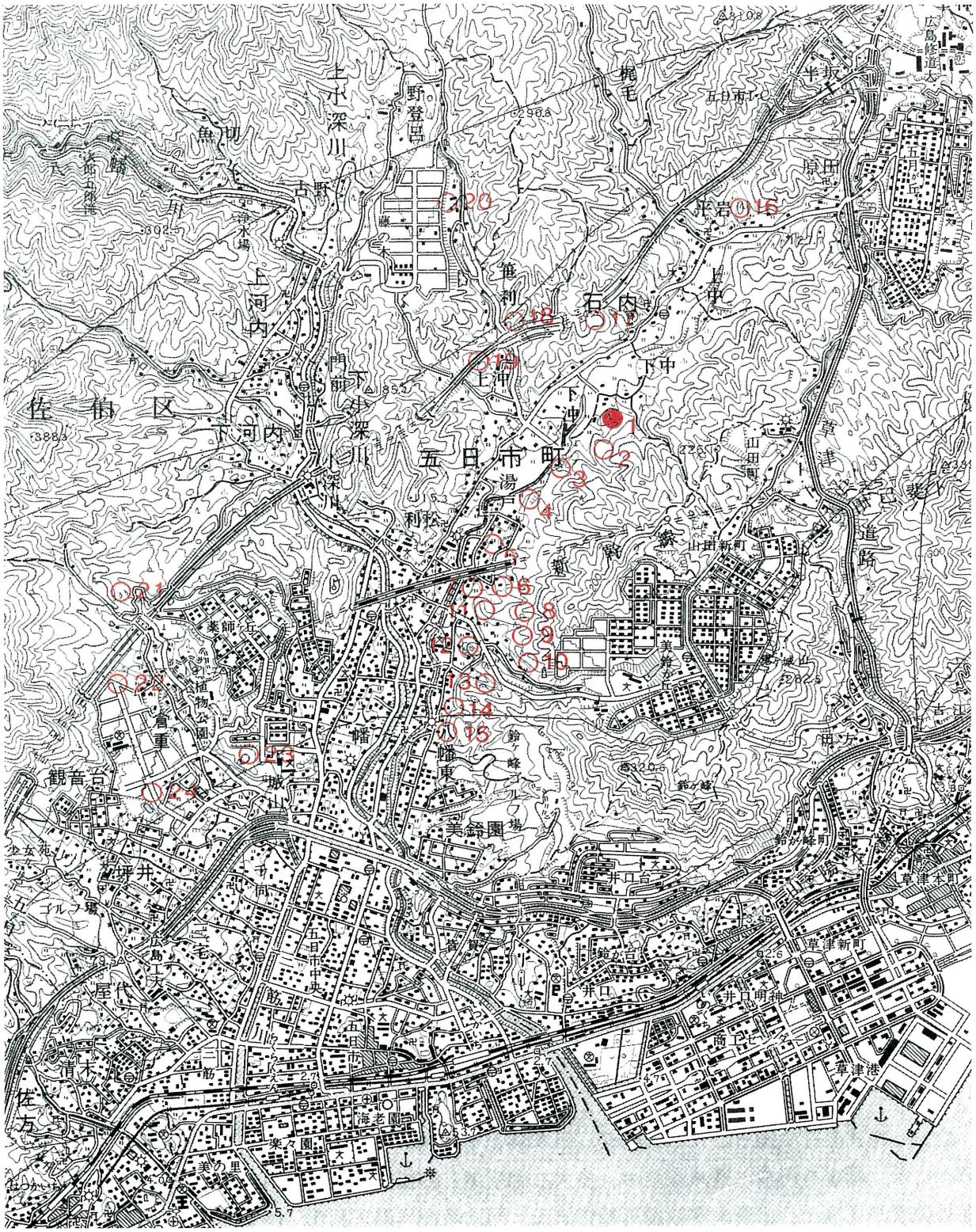
Ⅰ　はじめに

広島市教育委員会（以下、市教委とする）は、平成２（１９９０）年１０月８日、株式会社中国そごう都市開発・日本鋼管不動産株式会社共同事業体（以下、共同事業体とする）より、広島西部丘陵シティリゾートタウン（現：広島ライセンスパーク）開発事業地内の埋蔵文化財の有無並びに取扱いについて協議を受けた。そこで、市教委は、平成３（１９９１）年３月４日から５月２日までに試掘調査を行った結果、計画地内で埋蔵文化財包蔵地の存在を確認した。その後、市教委と共同事業体は埋蔵文化財の取扱いについて協議を重ねたが、現状保存は困難であり、記録保存もやむを得ないという結論に達した。これを受けて共同事業体は、財団法人広島市歴史科学教育事業団（以下、事業団とする）に発掘調査を委託して行うこととした。事業団は、平成６（１９９４）年４月から調査の準備を始め、５月９日から９月２６日まで実施した。

調査の実施に係わった関係者は、下記のとおりである。

調査委託者　　株式会社中国そごう都市開発・日本鋼管不動産株式会社共同事業体
調査受託者　　財団法人広島市歴史科学教育事業団
調査担当課　　財団法人広島市歴史科学教育事業団文化財課
調査関係者　　松原明二　常務理事
　　山出健志　文化財課長
　　若島一則　文化財課事業係長
　　稲葉瑞穂　文化財課事業係主査
調査者　　宮田浩二　文化財課事業係主事
　　越智尚之　文化財課事業係主事
調査補助員（５０音順）
（発掘作業）　　岩本佐代子、植木　恭子、江島　美香、岡原ちか子、尾崎　千鳥、鴉田愛子、義野　育子、木村　武勲、木村八重子、小嶋　千恵、住田　洋子、武田　清磨、田中　栄次、田中　義照、谷口　敏枝、長尾　明子、中島　新三、西本　秋穂、二反田憲子、野崎　　晃、林　正敬、広沢　英雄、福崎　聴子、福田　純子、藤本　朋子、舛田　愛子、溝手勇、宮崎　義照、八木　康子、安松　　弘、山田佐加枝、山本　利子、吉村　秀雄、渡辺サツエ
（整理作業）　　河合　淳子、佐伯ひとみ、菅原　彰子、住川　香代子、橋本　礼子

なお、株式会社中国そごう都市開発、日本鋼管不動産株式会社、市教委、石内公民館ほか多くの方々には、調査を円滑に進めるため、多大な御配慮と御協力をいただいた。また調査中、広島大学名誉教授潮見浩氏、広島大学教授川越哲志氏、同助教授河瀬正利氏、同助教授古瀬清秀氏、市教委石田彰紀氏から貴重な御指導、御助言をいただいた。さらに報告書作成にあたっては、次の諸機関、諸氏から広範囲な御教示並びに御協力をいただいた。財団法人愛媛県埋蔵文化財調査センター谷若倫郎氏、同作田一耕氏、愛媛県立歴史民俗資料館川原学氏、島根県鹿島町教育委員会赤澤秀則氏、鳥取県米子市教育委員会杉谷愛象氏、同下高瑞哉氏、島根県古代文化センター松本岩雄氏、島根県八雲立つ風土記の丘資料館大谷晃二氏、財団法人広島県埋蔵文化財調査センター桑原隆博氏である。ここに記して謝意を表したい。



1．黒谷遺跡　2．平尾遺跡　3．下沖３号遺跡　4．下沖５号遺跡　5．和田１号遺跡
6．利松住吉遺跡　7．利松遺跡　8．城ノ下Ａ地点遺跡　9．小林Ｂ地点遺跡　10．小林Ａ地点遺跡
11．高井２号遺跡　12．高井遺跡　13．早稲田遺跡　14．深山迫Ａ地点遺跡　15．深山迫Ｂ地点遺跡
16．串山城遺跡　17．水晶城遺跡　18．浄安寺遺跡　19．長尾城遺跡　20．笹利迫田遺跡
21．稗畑遺跡　22．倉重２号遺跡　23．倉重向山遺跡　24．白禿遺跡

第１図　黒谷遺跡周辺遺跡分布地図（Ｓ＝１：50,000）

Ⅱ　位置と環境

黒谷遺跡は広島市佐伯区五日市町大字石内字黒谷に所在する。

本遺跡の所在する石内地区は佐伯区北東部に位置し、北部山塊を源とする石内川が笹利川・梶毛川等の中小河川を合流させ、南西方向に流路をとりながら、最大幅約４００m、長さ約４ｋｍにわたる沖積低地を形成している。そして石内川は下流にある現在の国道２号線（西広島バイパス）付近で八幡川に含流し、広島湾に注ぎ込んでいる。さてこの沖積低地は、窓ガ山（標高７１１．８m)、向山（標高６６５．９m)、釈迦ケ岳（標高４１３．２m)、鈴ケ峰（標高３２０．６m）などの山塊とこれらの山塊に連なる標高３００m前後の山陵に取り囲まれている。またこれらの山塊・山陵からは、沖積低地に向けて幾つもの尾根が派生しており､尾根と尾根の間には小規模な谷地形も存在する｡これらの谷地形や沖積低地を見下ろすことができる尾根先端部の丘陵上では、最近の分布調査や発掘調査等から弥生時代後期と考えられる遺跡が数多く確認されている。

本遺跡もそれらの遺跡のひとつで、石内川左岸の山塊（標高２５０．２m）から北へ派生した尾根筋が西に約９０度向きを変えて延びる尾根先端部の標高４５～５３mの丘陵上に位置している。また本遺跡の北側には石内川の氾濫原が広がっているほか、南麓では尾根筋が西へ変換する地点まで深く谷が入り込んでおり、近年まで水田がつくられていた。なお本遺跡とこの水田面との比高は約２０mで、石内川沿いにある水田面との比高は約３０mである。

この谷を隔てた本遺跡南側の丘陵上には、平成５（１９９３）年度財団法人広島市歴史科学教育事業団（以下、事業団とする。）が発掘調査を実施した平尾遺跡(1)がある。平尾遺跡は標高６０～７４mの丘陵上に位置し、弥生時代後期中葉から後葉の時期の集落跡と弥生時代後期中葉から後葉の時期のいずれかから弥生時代後期終末乃至古墳時代初頭の時期の間に営まれた墳基群が発見されている。集落に関連する遺構としては住居跡２軒、掘立柱建物跡１棟等が、墳墓に関連する遺構としては土壙墓４１基、土器柑墓４基等が確認されている。

さらに本遺跡や平尾遺跡が発見された石内川東岸の低丘陵上で、現在までに発掘調査等が実施されて概要が判明している遺跡には以下のものがある。下沖３号遺跡(2)、下沖５号遺跡(3)、和田１号遺跡(4)は、広島市教育委員会（以下、市教委とする。）が昭和６０（１９８５）～６２（１９８７）年度に石内バイパス建設工事に伴って調査を実施している。下沖３号遺跡は標高４５m前後の丘陵上に位置する弥生時代後期中葉から古墳時代初頭の時期に営まれた集落跡で、住居跡４軒等が確認されている。下沖５号遺跡は標高３５m前後の丘陵上に付置する弥生時代後期前葉から古墳時代初頭の時期に営まれた集落跡で、住居跡１８軒（建て替え分は除く。)、掘立柱建物跡６棟等が確認されている。和田１号遺跡は標高２０～２４mの微高地に位置し、弥生時代後期終末から古墳時代初頭の時期と考えられる小型の住居跡１軒、掘立柱建物跡１棟が南側斜面から確認されている。このほかこの遺跡では、弥生時代前期及び古墳時代全期間にわたる住居跡も確認されており、この集落が長期間にわたって存続していたことが窺える。

さて平成２（１９９０）年度事業団が調査を実施した城ノ下Ａ地点遺跡(5)は、石内川・八幡川合流地点の沖積地をも見下ろすことができる標高７３～９３mの丘陵上に位

置している。この遺跡は弥生時代後期前葉から古墳時代初頭の時期に営まれた集落跡で、２３軒の住居跡が確認されている。また城ノ下Ａ地点遺跡に近接する丘陵上で発見された小林Ａ地点遺跡[6]及ぴ小林Ｂ地点遺跡[7]は、平成元（１９８９）年度に市教委が調査を実施している。小林Ａ地点遺跡は、標高８０ｍ前後の丘陵上に位置する弥生時代後期中葉から古墳時代初頭の時期に営まれた集落跡で、住居跡１７軒等が確認されている。標高１１０ｍ前後の丘陵上に位置する小林Ｂ地点遺跡は、弥生時代後期中葉から後葉の時期に営まれた集落跡で、住居跡２軒等が南側斜面において確認されている。

以上石内川東岸の遺跡の分布状況及び集落跡内の住居跡の配置あるいはその規模等についてみてきたが、石内川西岸においても近年の発掘調査等から弥生時代後期の様子がしだいに解明されつつある。石内の谷の最奥部付近の丘陵上に位置する串山城遺跡[8]は、平成５～６年度にかけて事業団が調査を実施し、弥生時代後期後葉のものと考えられる床面の径約５ｍの住居跡１軒が尾根頂部から北方向へ下った丘陵上から確認されている。また山陽自動卓道建設工事に伴って財団法人広島県埋蔵文化財センター（以下、県埋文センターとする。）が昭和５７（１９８２）～５８（１９８３）年度に調査を実施した遺跡には、水晶城遺跡[9]、浄安寺遺跡[10]等がある。水晶城遺跡は標高１０２～１１０ｍの丘陵上に位置する弥生時代後期中葉から後葉の時期に営まれた集落跡で、住居跡７軒等が確認されている。次に浄安寺遺跡は標高１１０ｍ前後の丘陵上に位置する弥生時代後期中葉から後葉の時期に営まれた集落跡で、住居跡２１軒（建て替え分は除く。）等が確認されている。また石内川支流笹利川の西岸にある標高１１０ｍ前後の丘陵上では、笹利迫田遺跡[11]が発見されており、県埋文センターが昭和５８（１９８３）年度に調査を実施した結果、土壙及び貝塚から弥生時代後期中葉から古墳時代初頭の特徴を示す土器が多量に出土したほか、住居跡１軒等を南側斜面から確認されている。さて目を転じて八幡川西岸をみると、通称極楽寺山（標高６９３．０ｍ）から東及び東南に向けて派生する丘陵上にはいくつかの遺跡が確認されており、現在までに発掘調査等によってその概要が明らかになった弥生時代後期の集落跡は、稗畑遺跡[12]、倉重向山遺跡[13]、倉重２号遺跡[14]白禿遺跡[15]等が挙げられる。まず稗畑遺跡だが平成２（１９９０）年度事業団が調査を実施した結果、尾根上平坦面及ぴ南側緩斜面から住居跡３３軒、掘立柱建物跡８棟等が確認され、八幡川流域では大規模な集落跡のひとつである。この集落跡は弥生時代後期後葉から終末の時期を中心として弥生時代後期前葉から古墳時代初頭の時期まで営まれたと考えられる。倉重向山遺跡は倉重川左岸の標高８５～１１０ｍの丘陵上に位置しており、平成２（１９９０）年度事業団が調査を実施した結果、弥生時代後期後葉から古墳時代初頭にかけての時期に営まれた集落跡で、住居跡７軒（建て替え分を含む。）等が確認されている。倉重２号遺跡は昭和５９（１９８４）年に、白禿遺跡は昭和６０（１９８５）年にそれぞれ県埋文センターが調査を実施している。倉重２号遺跡は倉重川右岸の標高１２０～１３０ｍの丘陵上に位置し、尾根上から２軒、斜面から１軒の住居跡が確認され、弥生時代後期後半の時期に営まれた集落跡と考えられている。白禿遺跡は倉重２号遺跡から南へ約７００ｍ離れた標高１２０ｍ前後の丘陵上に位置し、尾根上平坦面から住居跡１軒が確認されたが、この住居跡は弥生時代後期の時期に営まれたと考えられている。

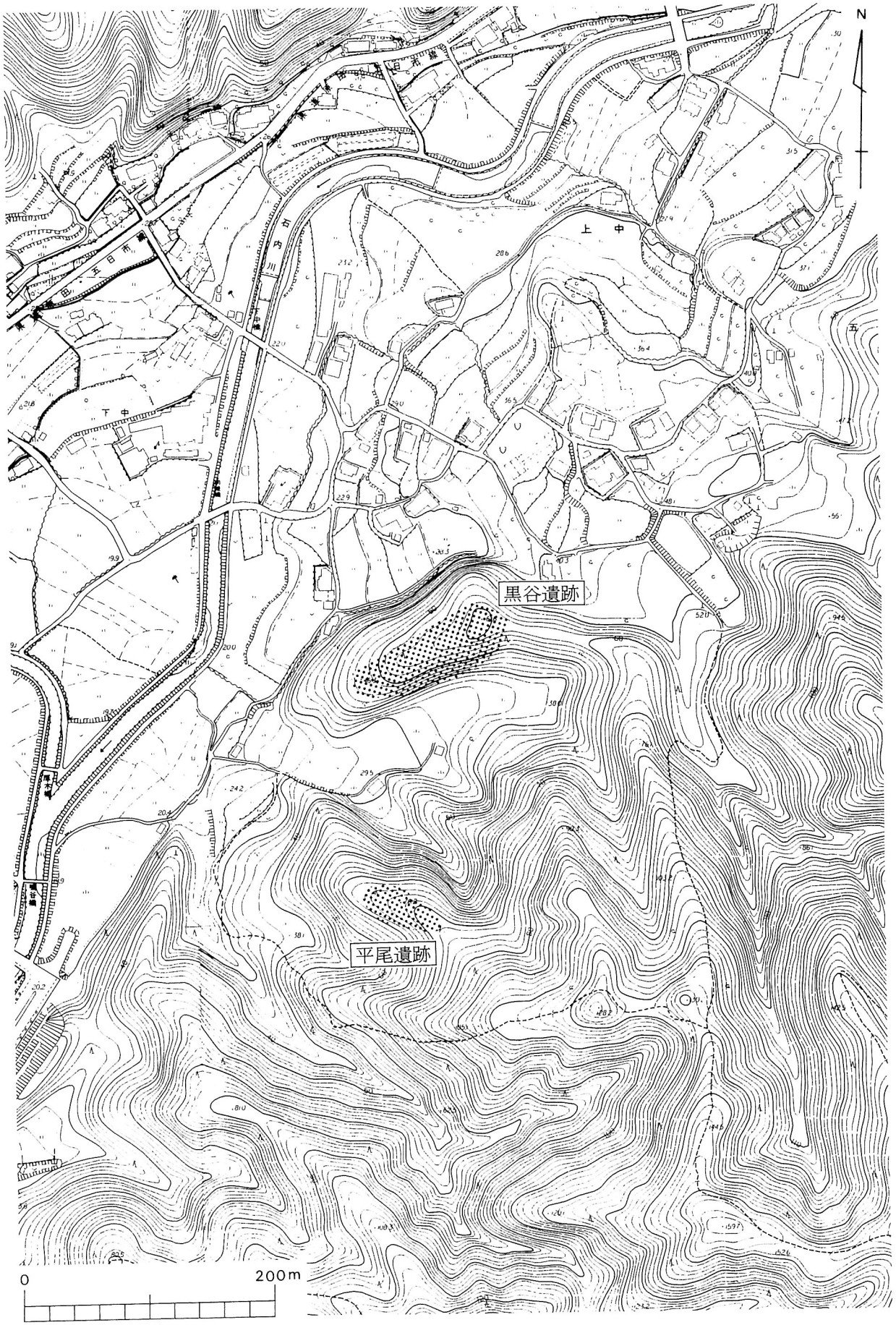
以上のことから、石内川流域における集落の分布についてみると下沖５号遺跡、浄安寺遺跡等の比較的大規模な集落がいくつか存在し、その周辺に下沖３号遺跡や小林Ａ地

点遺跡等の小規模な集落が存在していたことが窺える。

次に各集落の成立及び存続期間についてみると、ほとんどの集落が弥生時代後期中葉から後葉の時期に成立しているが、多くの集落は比較的短期間で廃絶しており、古墳時代前期の時期になると規模の大小は問わず集落はほとんど丘陵上から発見されなくなっている。すなわち、弥生時代後期の時期に丘陵上に存在した集落が古墳時代初頭の時期に丘陵上から姿を消しているということは、この時期に大きな社会的変化が起こった可能性があると考えることもできよう。

注＞

（1）財団法人広島市歴史科学教育事業団『平尾遺跡発掘調査報告』１９９３
（2）広島市教育委員会「下沖３号遺跡」『一般国道原田五日市（石内パィパス）道路改良工事事業地内遺跡群発掘調査報告』１９８８
（3）広島市教育委員会「下沖５号遺跡」『注（2）文献と同じ』１９８８
（4）広島市教育委員会「和田１号遺跡」『注（2）文献と同じ』１９８８
（5）財団法人広島市歴史科学教育事業団『城ノ下Ａ地点遺跡発掘調査報告ｊ　１９９１
（6）広島市教育委員会「小林Ａ地点遺跡」『小林Ａ‐Ｂ地点遺跡発掘調査報告』１９９０
（7）広島市教育委員会「小林Ｂ地点遺跡」『注（7）文献と同じ』１９９０
（8）平成５・６年度に財団法人広島市歴史科学教育事業団が調査を実施した。
（9）財団法人広鳥県埋蔵文化財センター「水晶城遺跡」『山陽自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（III)』１９８６
(10）財団法人広島県埋蔵文化財センター「浄安寺遺跡」『注（10）文献と同じ』１９８６
(11）財団法人広島県埋蔵文化財センター『笹利迫田遺跡発掘調査報告１９８５
(12）財団法人広島市歴史科学教育事業団『稗畑遺跡発掘調査報告　１９９２
(13）財団法人広島市歴史科学教育事業団『倉重向山遺跡発掘調査報告』　１９９１
(14）財団法人広島県埋蔵文化財センター「倉重２号遺跡」『月見城遺跡』１９８７
(15）財団法人広島県埋蔵文化財センター「白禿遺跡」『注（14）文献と同じ』１９８７



第２図　黒谷遺跡周辺地形図（Ｓ＝１：5,000）

III 遺　　構

１．遺跡の概要

黒谷遺跡は、石内川左岸の山塊（標高２５０ｍ）から北へ派生した尾根筋が西に直角に向きを変えて、延びる尾根先端部の標高４５～５３ｍの丘陵上に位置している。この丘陵は昭和時代初期から畑作地として使用されたためか、少なくとも３０～４０cmの削平を受けたと考えられ、現状では最大幅約１０ｍの平坦面を形成している。この丘陵の南側には狭小な谷が見られ、最近まで石内川に流れ込む谷水を利用して水田がつくられており、当時もこの谷水田が生活基盤であった可能性が高いと思われる。なお南側にあるこの谷水田面との比高は約２０ｍで、北側すなわち石内川沿いにある水田面との比高は約３０ｍである。

調査の結果、本遺跡の遺構については尾根上平坦面から重複した竪穴住居跡と掘立柱建物跡を、尾根南側の斜面からテラス状遺構を確認した。尾根上平坦面の遺構は２箇所で、先端部から竪穴住居跡２軒（建て替え分を除く）、中央よりやや西側から竪穴住居跡３軒（建て替え分を除く）およびそれらの住居跡の東側から掘立柱建物跡２棟を確認した。尾根南側の斜面の遺構は２箇所で、テラス状遺構をそれぞれで一基ずつ確認した。遺物としては、弥生土器、鉄器、石器が出土した。

２．遺構

第１号・第２号住居跡（第４図・第６図）

丘陵先端部から重複した２軒の住居跡を確認した。東側にある床面の高い方から第１号、第２号住居跡と呼称する。床面のレベル差は第１号住居跡と第２号住居跡の南西側で１３cm前後、それ以外は３０～４０cm前後である。

第１号住居跡の平面プランはほぼ円形で、規模は径約８．２ｍである。壁高は最高（北東側）で４２cm、壁溝は北側半分と南側の一部で残存し、幅１４～４２cm、深さｌ～６cmである。床面から柱穴と考えられるピット１７個を確認したが、そのうちピットの規模、壁との位置関係等から１２個が本住居跡に伴う主柱穴と考えられる。これらは径２０～５０cm、深さ１７～６２cm、底面レベルは４７．７～４８．２ｍである。平面プランに対応する土柱穴の組み合わせとしては、まずA）Ｐ１－Ｐ２一Ｐ３一Ｐ５－Ｐ８一Ｐ１０－Ｐ１２の７本柱の組み合わせが考えられる。またＰ５、Ｐ８、Ｐｌ０については、隣接する位置にそれぞれＰ６、Ｐ９、Ｐｌ１があることから本住居跡は７本柱の組み合わせの時にｌ回以上の建て替えがあったと推定される。さらに主柱穴の位置関係からＢ）Ｐ１－Ｐ４一Ｐ７一Ｐｌ２の４本柱の組み合わせも考えられる。Ｐ４とＰ７については柱穴が重複しているように観察できることから、この４本柱の組み合わせの時にも１回以上の建て替えがあったと推定される。本遺構に伴う遺物としては、柱穴内から出土した弥生土器（１）、床面から出土した弥生土器（２．３．４）があるが、これらは胴部最大径が中位付近に下がる丸胴化の傾向を示すこと、肩部に刺突文などの文様が見られないこと等から上深川II式でも比較的新しい形態の傾向を示しており、本住居跡は上深川ｎ式でも比較的新しい時期のものと考えられる(1)。

第２号住居跡は第１号住居跡の内側に付置し、床面から多量の炭化材を検出したことから焼失住居と考えられる。本住居跡の平面プランは円形で、規模は径約４．６ｍであ

る。壁高は最高（西側）で３１cm、南に下がるにつれて次第に高さを減じ、最低（南側）で１３cmである。壁溝は北東部分と西側の一部で確認でき、幅７～１０cm、深さ５～６cmである。

床面からは柱穴と考えられるピット５個を確認したが、そのうち柱穴間及び壁との位置関係等から主柱穴と考えられるのはＰ１３、Ｐ１４、Ｐ１５、Ｐ１６の４個である。これらは径２８～４３cm、深さ５７～７１cm、底面レベルは４７．５m前後で、柱穴間距離はＰ１３一Ｐ１６、Ｐ１４一Ｐ１５の南北方向で２５０cm前後、Ｐ１５－Ｐ１６、Ｐ１３一Ｐ１４の東西方向で２３５cm前後である。これらのことから本住居跡は４本柱構造の住居と考えられる。また床面中央部付近から長径６９cm、短径６４cm、深さ６～１１cmの楕円形の掘り込みを確認した。内部には炭化物を多量に含む黒色土が充満しており、その位置および形状から本住居跡に伴う炉跡と考えられる。なお東側の床面から大きさ１０cm前後の角礫１４個が、西側の床面から長辺３８cm、短辺２８cmの円礫１個がそれぞれ壁近くから見つかった。角礫の中で後述する炉跡に近いもののいくつかは、表面が少し赤変したものや炭化材の細片が上面にあるものなどがあった。円礫は表面が少し赤変し剥離した状態であった。以上のことから角礫、円礫については、住居焼失時点では住居内にあったものと推定できるが、用途については不明である。

ところで前述のように本住居跡内からは多量の炭化材を検出したが、本住居跡の想定される床面レベルから１０cm前後浮いた状態であった。また炭化材は、放射状に広がった状態で検出したものが多かったが、東西方向に向いたものよりも南北方向に向いたものの方が良好な残存状態を示していた。なおこれらの炭化材は、科学分析の結果、ブナ科のツブラジイおよびシイノキ属であったが、これらの樹種は当時の周辺の植生を反映しているものと思われる。

本遺構に伴う遺物としては、中央部の炉跡付近から出土した弥生土器（５．６）がある。このうち弥生土器（６）は円筒状で底がないという特異な器形をしており、その機能については種々の説があり注目されている。本土器は器形の小さくすぼまる方を壁方向すなわち東方向に、大きくひろがる方を床面中央部方向すなわち西方向にそれぞれむけて、あたかも置かれたものが倒れ、そのまま押しつぶされたかのような状態で出土している。このことは、本土器が倒れた時点での位置をほぼ保ったままである可能性が高いことを示していると想定できよう。さらに本土器の出土状態を詳細に観察すると、大きくひろがる方から２／３の部分と小さくすぼまる方から１／３の部分では大きな違いがあることが確認できる。まず大きくひろがる方から２／３の部分については、出土した破片が比較的大きくかつ内面を合わせるようにして重なった状態で出土していることから、本土器が倒れた時点ではこの部分については割れずに原形を保っていた可能性が高いと考えられる。これに対して、小さくすぼまる方から１／３の部分については、大きくひろがる方から２／３の部分に比べて破片が比較的小さなものであり、かなりの範囲に散乱した状態であったことが観察できる。特に床面に接する部分については、上側の部分に比べてかなり細かな破片となっていることが確認できる。

以上のことから、次のことが考えられる。

！大きくひろがる方から２／３の部分に比べて、小さくすぼまる方から１／３の部分の方がより大きな衝撃を受けたものと考えられる。

”小さくすぼまる方から１／３の部分についてみると、床面に接する部分の方が上側の

部分よりも、より強い衝撃を受けたものと考えられる。

この！と”から、大きくひろがる方を下に小さくすぼまる方を上にして置かれていた本土器が東方向にむけて倒れた可能性が極めて高いと考えられる。この場合、本土器の出土位置から倒れる前の位置を推定すると床面中央部付近にある炉をすっぽりと覆う位置に置かれていたこととなる。またその場合、炉をすっぽりと覆う位置に置かれているという状態は、未使用時の状態とは考えにくく、本土器が使用されている時に住居が焼失することになったと考える方が自然であろう。

以上のことをまとめると、本土器は大きくひろがる方を下に小さくすぼまる方を上にして炉を覆う位置で使用されていた可能性が高いと考えられる。

また弥生土器（５）は、その形態的特徴から上深川II式の時期のものと考えられる。このほかに本住居跡の埋土中からも細片のため図示しえないものの上深川II式及び上深川III式（古）の特徴をもつ土器片が出土していることから、本住居跡は上深川ｎ式の比較的新しい時期ないしは上深川III式（古）との過渡期にあたる時期の可能性が極めて高いと考えられる。

第１号住居跡と第２号住居跡の新旧関係は、土層観察から第１号住居跡が第２号住居跡に先行すると考えられる。まず第１号住居跡についてみると、主柱穴と考えられるピットと残存する壁との位置関係等から、！Ｂ）の４本柱の組み合わせの住居がＡ）の７本柱の組み合わせの住居に先行すること、”Ｂ）とＡ）それぞれの組み合わせにおいて１回以上の建て替えがあった可能性が高いこと、＃Ｐ１がＢ）とＡ）の組み合わせの柱穴に共用されていることから４本柱構造の住居の使用が終了した後、引き続いて７本柱構造の住居がつくられた可能性が高いこと、等が考えられる。

次に遺構に伴う遺物からみると、第１号住居跡からは上深川II式の比較的新しい時期のものと考えられる弥生土器（１．２．３．４）が出土している。また第２号住居跡からは上深川II式の時期のものと考えられる弥生土器（５）が出土しているが、このほか住居跡内埋土中から出上した土器なども参考とすれば、第２号住居跡は上深川II式の比較的新しい時期ないしは上深川III式（古）との過渡期にあたる時期の可能性が高いと考えられる。これらのことから、第１号住居跡と第２号住居跡の間に大きな時期差がなかったものと推測されることから、第１号住居跡と第２号住居跡は連続して営まれた可能性が高いと考えられる。

以上のことから、第１号住居跡は１回以上の建て替えがあった４本柱構造の住居から連続して１回以上の建て替えがあった７本柱構造の住居がつくり替えられ、その後引き続いて第２号住居跡が営まれたと想定される。時期的にみると、第１号住居跡が上深川II式の後半、第２号住居跡が上深川II式の末期ないし上深川III Ｉ式（古）との過渡期の時期である可能性が高いと考えられる。

第３号・第４号・第５号住居跡（第５図）

丘陵中央部の平坦面から重複した３軒の住居跡を確認した。各住居跡は東側から西側に向けて床面の高い順に第３号住居跡・第４号住居跡・第５号住居跡と呼称する。床面のレベル差は第３号住居跡と第４号住居跡が１４cm前後、第４号住居跡と第５号住居跡が３ cm 前後である。

第３号住居跡の平面プランは残存する壁から楕円形が想定でき、規模は長径約９ｍ、短径約８ｍである。第３号住居跡の床面西側は第４号住居跡と重複し、床面南側は削平を

受けているためか一部消失している。壁は北側から東側にかけて残存し、壁高は最高（東側）で３７cmである。壁溝は壁が遺存している部分のみ確認でき、幅７～１２cm、深さ５～８cmである。床面から柱穴と考えられるピット１４個を確認したが、そのうちピットの規模、壁との位置関係等から１０個が主柱穴と考えられる。これらは径９～３３cm、深さ１５～６８cm、底面レベルは５０．４～５０．８ｍである。本住居跡に伴う主柱穴の組み合わせとしては、A）Ｐ１一Ｐ３一Ｐ５一Ｐ６－Ｐ１２－Ｐ１４の６本柱、及びB）Ｐ２一Ｐ３一Ｐ４一Ｐ７一Ｐ９一Ｐｌ４の６本柱が考えられ、１回以上の建て替えがあったものと推定される。

本遺構に伴う遺物は出土していない。また埋土中からも遺物が出土していないため、本住居跡の時期については明確にしがたい。

第４号住居跡は第３号住居跡の内側に位置し、平面プランはほぼ楕円形でその規模は長径約７．４ｍ、短径約６．８ｍである。壁は南東側の一部を除き残存し、壁高は第３号住居跡と重複している部分では最高（東側）で１４cm、重複していない部分では最高（北西側）で２４cmである。壁溝は残存する壁の約５分の２にあたる北から東にかけての部分で確認されており、幅８～１２cm、深さ約１cmである。

想定される平面プランの中で本住居跡に伴う柱穴と考えられるピット１３個を確認した。そのうちピットの規模および位置関係等から主柱穴と考えられるのはＰ９、Ｐｌ０、Ｐ１１、Ｐ１４の４個である。これらは径２２～２８cm、深さ３３～５１cm、底面レベルは５０．５ｍ前後で、柱間距離は南北方向のＰ９一Ｐ１４、Ｐｌ０－Ｐｌ１は３７０cm前後、東西方向のＰｌ１－Ｐｌ４は３４０cm前後、Ｐ９－Ｐｌ０は３２０cmである。これらのことから本住居跡は長方形に主柱を配した４本柱構造の住居と考えられる。またＰ９と隣接する位置にＰ８（径３４cm、深さ５１cm、底面レベル５０．３ｍ）があることから第４号住居跡は１回以上の建て替えが行われたと推定される。

また住居跡内の北側におけるＰ９一Ｐ１０の柱穴問のほぼ中間付近には、壁に沿って床面より６～１１cm高くなっている部分が確認できる。この高床部は、ほぼ長方形のプランで長さ１５０cm前後、幅１００cm前後である。この部分については壁に沿った位置にあり、Ｐ９一Ｐ１０を結ぶラインと壁とでつくる空間に何らかの規制を受けて造られたかのように観察されることから、本住居跡に伴う何らかの施設と推測されるがその目的については不明である。

本遺構に伴う遺物は出土していないが、埋土中から上深川II式と上深）III式（古）の特徴を持つ土器片が出土している。したがって本住居跡は上深川II式から上深川III式（古）の過渡期ないしは上深川III式（古）の時期のものである可能性が高いと考えられる。

第５号住居跡は第４号住居跡の内側に位置し、平面プランは隅丸方形で規模は南北約４ｍ、東西約４．４ｍである。壁は南側の部分を除き残存しており、壁高は最高（東側）で第４号住居跡と重複している部分で約６cmある。壁溝は幅４～１１cm、深さ２～７cmである。

想定される平面プランの中で本住居跡に伴う柱穴と考えられるピットは３個あり、そのなかで柱穴の規模および位置関係から主柱穴と考えられるのはＰ１３、Ｐ１５である。これらは径２２～２８cm、深さ３４～４２cm、底面レベルは５０．５ｍ前後及び柱間距離は２６０cmであることから、本住居跡は２本柱構造の住居と考えられる。

なお床面中央部付近で１１０cmＸ９０cmの範囲から厚さ最大１１cmの炭化物を多量

に含んだ黒褐色土を確認したが、その検出状況及びその位置等からこの部分が本住居の炉跡として使用された可能性が高いと思われる。尚、この黒褐色土層の中からは弥生土器（７）が出土した。本遺構に伴う遺物は、上述した弥生土器（７）１点だけであるが、その形態的特徴から本住居跡は上深川III式の時期のものであると考えられる。

さて３つの住居跡の新旧関係は、土層観察から第３号住居跡が第４号住居跡に先行し、第４号住居跡が第５号住居跡に先行すると考えられる。まず、第３号住居跡についてみると、Ｐ９を第４号住居跡と共有していることから本住居跡はＡ）の組み台わせの住居からＢ）の組み合わせの住居へと建て替えが行われたと想定できる。また第３号住居跡のＰ９及びＰ１４は第４号住居跡にも共用されていることから、第３号住居跡の使用が終了した後、引き続いて第４号住居が造られた可能性が高いと考えられる。

次に遺構に伴う遺物からみると、第５号住居跡から出土した上深川III式（古）に属する弥生土器（７）のみである。このほか住居内埋土中から出土した土器などを参考とすれば、第４号住居跡は上深川II式から上深川III式（古）の過渡期ないしは上深川III式（古）の時期の可能性が高いと考えられることから、第４号住居跡と第５号住居跡の問についても大きな時期差がなかったものと推測される。

以上のことから、３つの住居は連続して営まれた可能性が高いと考えられるが、第３号住居跡と第４号住居跡についてはそれぞれ１回以上の建て替えが想定できる。また時期的には第３号住居跡から手がかりとする遺物が出土していないため明言できないが、第３号住居跡が上深川II式の後半、第４号住居跡が上深川II式から上深川III式（古）の過渡期、第５号住居跡が上深川III式（古）の時期となると考えて大過なかろう。

なお第５号住居跡の床面中央部から深さ３０cm前後の不規則な形をした掘り込みを確認したが、この掘り込み内の埋土を観察すると、中程から上端までは炭化物を含まない暗赤褐色土層であったが底面近くからは炭化物をわずかに含んだ黒褐色土層を検出した。このことからこの掘り込みが炉跡かどうか明確にしえない。さらにこの掘り込み上には先述した第５号住居跡の炉跡と考えられる黒褐色土層を確認していることから、この掘り込みが第５号住居跡に伴うものかどうかについても明確にしえない。

第１号・第２号掘立柱建物跡（第７図・第８図）

丘陵中央部で第３号～第５号住居跡の東側から重複した２棟の建物跡を確認した。南側の方を第１号掘立柱建物跡、北側の方を第２号掘立柱建物跡と呼称する。

第１号掘立柱建物跡の棟方向はＮ６２。Ｗで、桁行８００cm前後、梁行４５０cm前後の１間×２問の掘立柱建物跡と考えられる。６つの柱穴は底径４５～５６cm、深さは削平されているため現状では北側の３個が２５～３３cmで、南側すなわち丘陵斜面に面する３個が６～１７cmである。南側の３個のうち最も西側にあるものはかなりの削平を受けているためか、他の柱穴より残存状態が良くない。なお底面レベルは５１．５～５１．８m、桁行の柱間は３３８～４６８cmである。本遺構に伴う遺物は出土していない。第２号掘立柱建物跡は、棟方向Ｎ２８。Ｅで、桁行４７０～４８０cm、契行４５０～４６０cmの１間×１間の掘立柱建物跡であると考えられる。４つの柱穴は底径４８～・５６cm、深さは削平されているため現状では１５～３１cm、底面レベルは５１．５～５１．８cmである。

本遺構に伴う遺物は出土していない。

以上のことから、これらの掘立柱建物跡についてはともに時期を明確にし得なかった

が、柱穴の規模や柱穴間の間隔等からこれらの遺構の時期を推測すると、以下のとおりである。これらの遺構の柱穴の規模及び柱穴間の間隔などは周辺の弥生時代のものに比べて極めて大きいことから弥生時代のものと考えると疑問は残るものの平面プランが弥生時代の高床式建物の一般的な特徴である梁行１間であること、柱掘形が方形でなくほぼ円形か楕円形であること、周辺の遺跡の掘立柱建物跡はそのほとんどが弥生時代のものであること等から、弥生時代の遺構である可能性が高いと考えられる。この場合、隣接する重複した住居跡とほぼ同時期と考えておきたい。また２つの掘立柱建物跡の新旧関係については不明であるが､第１号掘立柱建物跡の柱穴と第３号住居跡の壁とは約１．５ｍしか離れておらず、第１号掘立柱建物跡と第３号住居跡が同時併存していたとは考えにくいことから、第３号住居跡と同時併存していた可能性が高いのは第２号掘立柱建物跡と考えられる。その場合は、第２号掘立柱建物跡が第１号掘立柱建物跡に先行すると考えられる。

第１号テラス状遺構（第９図）

第１号テラス状遺構は、第３号～第５号住居跡の南側斜面に位置している。本テラス状遺構は斜面を最大約１ｍ掘り込んで細長い平坦面を造りだしている。現状ではこの平坦面は幅が８．４ｍ、奥行きが最大（東側）で１．１ｍである。平坦面からはピット３個を確認したが、その規模、形状からいずれも柱穴と考えられる。これらは底径１０～１２cm、深さ３１～４８cmである。３つの柱穴は壁際に沿って２．４ｍ前後の等間隔で並んでいることからなんらかの施設の痕跡と考えられるが、その性格については不明である。

本遺構に伴う遺物は出土していない。

第２号テラス状遺構（第１０図）

第２号テラス状遺構は､第１号･第２号掘立柱建物跡の南東側斜面に位置している｡本テラス状遺構は斜面を最大約１．２m掘り込んで細長い平坦面を造りだしている。現状ではこの平坦面は幅が１０．６ｍ、奥行きが最大（中央部）１．４ｍである。なお壁溝が壁際に沿って掘られており、幅は８～２８cm、深さは３cm前後である。本遺構に伴う遺物は出土しなかった。

注＞

（１）広島市教育委員会『一般国道原田五日市（石内バイパス）道路改良工事事業地内遺跡群発掘調査報告』１９８８
広島市教育委員会『岩上山田遺跡発掘調査報告』１９８８
なお時代的位置づけについては、上深川I式を弥生時代後期前葉に、上深川II式を弥生時代後期中葉から後葉に、上深川III式（古）を弥生時代後期終末から古墳時代初頭として整理し、以下すべてこれに準拠した。

Ⅳ　遺　　物

本遺跡から出土した遺物には弥生土器・鉄鏃・砥石があるが、遺構に伴うものは少なく斜面から発見したものがほとんどである。弥生土器については、完形のものは少なく、ほとんどが破片で出土したため図示できたものはわずかである。個々の土器の詳細については後掲する観察表に譲ることとして、以下それぞれの出土遺物の概略について述べることとする。

（１）弥生土器（第１１図～第１４図）

本遺跡から出土した弥生土器については、甕形土器、壺形土器、鉢形土器をはじめ、蓋形土器、器台形土器などの器種も見られる。これらの土器はいずれも弥生時代後期から古墳時代初頭の特徴を示す土器と考えられるが、甕形土器、壺形土器等については、口縁部の形態的特徴等から以下の３つに分類することができる。

！口縁部を「く」の字状に外反させ、端部に粘土を張り付けることによって肥厚させて、３条の凹線が施されているもの。

”口縁部を「く」の字状に外反させ、端部を平たくおさめているもの、または端部をつまむことによってわずかに肥厚させているもの。

＃口縁部を「く」の字状に外反させ、端部は器厚を減じつつ丸くおさめているもの。

それぞれの形態的特徴から！は上深川Ⅰ式、”は上深川Ⅱ式、＃は上深川Ⅲ式（古）に属する土器と考えられる。

次に土器の出土量をみると、出土土器のほとんどが”の特徴をもつものと＃の特徴をもつものとで占められているものの、”の特徴をもつものの方がより多く出土している。なおこれらの土器は遺跡内ほぼ全域から出土している。また！の特徴をもつものについては、南側斜面から出土した鉢形土器１点のみである。以上のことから、本遺跡は弥生時代後期後葉の時期を中心として主に利用され、後期終末乃至古墳時代初頭の時期に廃棄された遺跡と考えられる。なお南側斜面から！の特徴をもつ鉢形土器が出土しているため、この時期に属する何らかの施設が本遺跡に存在した可能性も考えられよう。

ところで南側斜面から蓋形土器が２点（８．１３）出土しているが、いずれも口縁部内面に煤の付着が確認できることから、煮炊きする際に使用された可能性が高いと思われる。この蓋形土器については、現段階では石内川流域の遺跡からはほとんど出土しておらず、確認可能なものとしては和田１号遺跡（１点）と串山城遺跡（１点）から出土したものが挙げられる。

ところで焼失住居である第２号住居跡内からは、極めて大形でしかも円筒形で底がないという特異な器形をした土器が出土している。この土器の使用形態等についてはⅤまとめの項で述べることとし、本報告書では小さくすぼまる方を口縁部、大きくひろがる方を裾部として図示し、寸法等についてもこれをもとに記載する。

さて本土器を観察すると、口縁部はわずかに内湾しながら端部に至っており、体部は口縁部からわずかずつひろがりながら下方へのびているが、口縁端部から２／３あたりで大きく「ハ」の字状にひろがっている。さらに裾部になって一段と大きくひろがって瑞部に至っているが、口縁端部、裾端部は共に平たくおさめている。また本土器の器厚をみると、口縁端部から裾部にむけて徐々に厚みを増しているが、大きく「ハ」の字状にひろがる屈曲部あたりが最も厚くなっており、約３．７cmになっている。さらにこの

部分から裾部にむけては徐々に薄くなって端部に至っている。なお大きく「ハ」の字状にひろがる掘曲部あたりでは、内側から粘土が張りつけてあることが確認できる。仕上げ調整をみると、外面はハケ目調整だけだが、内面については口縁端部から下方へ約８cmヨコ方向にハケ目後､指によるナデを施しており比較的丁寧に仕上げているのに対し、体部下方で大きく「ハ」の字状に開いている裾書部部分ではヨコ方向を中心としたハケ目だけで口縁部に比べて丁寧に仕上げているとは言いがたい。また内面に付着した煤だが、裾部あたりにもわずかに煤の付着が見られるものの体部が大きく「ハ」の字状にひろがり始める屈曲点あたりにかなりの付着が見られ、その地点より上方にも付着が確認できる。外面の裾部あたりにもわずかながら煤の付着が確認できるもののその他の使用痕と考えられる摩擦痕等は見られない。色調は内外面共に赤褐色で、胎土は他の弥生土器と殆ど変わらないことから他地域で製作されてここに持ち込まれたのではなく、この地域で製作されたものと考えられる。

（２）鉄鏃（第１５図）

２３は第３・４・５号住居跡南側斜面の埋土中から出土した有茎で凸基式の鉄鏃である。残存長は３８．５mmで刃部は最大幅１３．５mm、厚さ２mm、断面はレンズ状で、茎部については最大幅７mm、厚さ３mm、断面は方形である。

２４は第１・２号掘立柱建物跡南側斜面の埋土中から出上した有茎で凸基式の鉄鏃である。残存長は４７．５mmで、刃部は最大幅２３mm、厚さ３mmで、茎部については最大幅８．５mm、厚さ２mmである。断面は刃部、茎部ともにレンズ状である。

２５は調査区内東端斜面の埋土中から出土した有茎で凹基式の鉄鏃である。残存長は３８．５mm、刃部は最大幅３９mm、厚さ２mm、断面はレンズ状で、茎部については最大幅３mm、厚さ２．５mm、断面は方形である。

（３）砥石（第１５図）

２６は、第１号住居跡埋土中から出土したもので、全長７４mm、最大幅４５mm、最大厚１０mm、重童４１．２ｇである。使用した石の材質は安山岩である。使用面は欠損箇所がある面を除く５面でいずれの面でも条痕が確認できる。５つの使用面のうち、幅の広い面のひとつは著しくくぼんでいるほか他の４面に比べて数多くの残されている条痕を確認することができることから、この使用面の使用頻度が高かったことが考えられる。

２７は、第２号住居跡埋土中で第１号住居跡床面とほぼ同レベルの位置から出土したもので、残存長７０mm、最大幅３９mm、最大厚１８mm、重童９４．２ｇである。便用した石の材質は安山岩である。使用面は幅の広い２つの面で、両面とも中央部乃至縁辺部付近にある条痕を確認することができる。

２８は、第２号住居跡埋土中で第１号住居跡床面とほぼ同レベルの位置から出土したもので、残存長９５mm、最大幅５７mm、最大厚４０mm、重量４２５．６ｇである。便用した石の材質は玄武岩である。この石の断面は不整な五角形で、使用面は小口面を除く長辺側５面のうち４面でいずれの面からも長辺方向に平行する条痕を確認できる。

２９は、調査区内埋土中から出土したもので、残存長５３mm、最大幅３８mm、最大厚１３mm、重量４７．１ｇである。使用した石の材質は流紋岩である。使用面は幅の広い２つの面で、わずかに長辺方向に条痕を確認することができる。

第１表　黒谷遺跡出土土器観察表

No.	出土位置	器　種	寸法（cm）	器　形	調整・成形	備　考
1	第１号住居跡柱穴内	甕形土器	口径18.0cm	口縁部は「く」の字状に外反し、端部は上下にわずかに肥厚しながら、平たくおさめる。	外面；口縁部はヨコナデ、頸部以下タテ方向にハケ目後ナデ。肩部にヘラ状工具による刺突文あり。 内面；口縁部はヨコナデ、頸部以下ヘラ削り。	胎土；大粒の長石・石英砂粒を含む。 焼成；良好 色調；暗赤褐色
2	第１号住居跡床面	甕形土器	胴部最大径21.0cm	胴部は張りが弱く、倒卵型を呈する。底部は丸底である。	外面；口縁部から胴部上半にかけてはタテ方向にハケ目後荒いナデ下半は縦方向に荒いヘラ磨き。 内面；口縁部はヨコ方向にヘラ磨き、頸部以下ヘラ削り。	胎土；長石・石英砂粒を含む。 焼成；軟調 色調；淡黄褐色 内面底部全体に炭化物が付着。 外面胴部上半に煤が付着。
3	第１号住居跡床面	鉢形土器	口径11.8cm 器高7.6cm	胴部は内湾しながら立ち上がり、口縁部は丸くおさめる。	外面；口縁部は強いヨコナデ、胴部以下タテ縦方向にハケ目後ナデ。 内面；口縁部は強いヨコ方向にナデ、胴部以下ナデ。	胎土；長石・石英砂粒を含む。 焼成；良好 色調；赤褐色
4	第１号住居跡床面	壷形土器	胴部最大径14.1cm	胴部は楕円形を呈し、最大径は中央部付近にある。底部は丸底である。	外面；胴部上半はヨコ方向にハケ目後ていねいなナデ、下半はヨコ方向にハケ目後ナデ。 内面；口縁部周辺はナデ、胴部上半は左ナナメ上方にハケ目。下半はナデ、指頭厚痕が明瞭に残る。	胎土；長石・石英砂粒を含む。 焼成；良好 色調；赤褐色
5	第２号住居跡床面	鉢形土器	口径10.1cm 器高61.4cm	胴部は丸底の底部から内湾気味に立ち上がり、口縁部は丸くおさめる。	外面；口縁部はヨコナデ、胴部以下タテ方向にハケ目後ナデ。 内面；ナデ。	胎土；大粒の長石・石英砂粒を含む。 焼成；軟調 色調；淡赤褐色 内面口縁部に３cmにわたり、帯状かつ部分的に炭化物が付着。

No.	出土位置	器　種	寸法（cm）	器　形	調整・成形	備　考
6	第２号住居跡床面	コシキ形土器	口径9.3cm 底形35.0cm 器高61.2cm	口縁端部は平たくおさめる。体部は口縁部からわずかずつひろがりながら下方へのび、口縁端部から2／3あたりで「ハ」の字状に大きくひろがり、裾端部に至る。裾端部は平たくおさめる。	外面；体上部2／3はタテ方向にハケ目。以下1／3は右斜め下方向にハケ目。裾部はヨコナデ。 内面；口縁部はヨコ方向にハケ目後ナデ。体上部2／3はハケ目後部分的にナデ。接合部分には指頭圧痕が残る。以下1／3はハケ目。	胎土；金雲母・長石石英砂粒を合む。 焼成；良好 色調；赤褐色 内面屈曲部付近からその上方にかけて煤が付者。「ハ」の字状に開いた体下部の内外面ともごくわずか煤が付者。
7	第５号住居跡床面	鉢形土器	口径16.8cm	口縁部は外反し、端部は器厚を減じつつ丸くおさめる。	外面；口縁部はハケ目後約1cmおきに暗文状のヘラ削りを施す。頸部以下ハケ目。 内面；口縁部はヨコナデ、頸部以下ヘラ削り。	胎土；大粒の長石・石英砂粒を含む。 焼成；良好 色調；暗赤褐色
8	第１・２号住居跡南側斜面	壷形土器	頂部径5.2cm 口縁部径21.0cm 器高61.4cm	胴部は平坦な頂部から「ハ」の字状に開き、口縁端部は平たくおさめる。	外面；口縁部はヨコナデ。胴部・頂部は磨滅が激しく不明。 内面；口縁部はヨコナデ。胴部はヨコ方向にハケ目後ナデ。	胎土；長石・石英砂粒を含む。 焼成；良好 色調；外面赤褐色 内面暗黄褐色内面口縁部に煤が付着。
9	第３・４・５号住居跡西側尾根上	高坏	底径13.6cm	脚柱部は下方へ緩く外湾しながら、裾部は「ハ」の字状に開き、脚端部は平たくおさめている。脚柱部3ケ所に丸いスカシが外側からあけられている。	外面；脚柱部はタテ方向にハケ目、裾部はタテ方向にハケ目後ナデ。 内面；脚柱部はナデ、裾部はヨコナデ。	胎土；長石・石英砂粒を含む。 焼成；良好 色調；赤褐色
10	第３・４・５号住居跡南東側斜面	甕形土器	口径13.0cm 器高33.8cm 胴部最大径22.6cm	口縁部は「く」の字状に外反し、端部は平たくおさめる。倒卵形状の胴部は張りが弱く、最大径は中位にある。底部は丸底である。	外面；口縁部はヨコナデ、胴部はタテ方向にハケ目後ナデ。肩部にヘラ状工具による刺突文あり。 内面；口縁部はヨコナデ、胴上部1／3はヘラ削り、以下ヘラ削り後タテ方向にハケ目。	胎土；大粒の長石・石英砂粒を含む。 焼成；良好 色調；赤褐色 外面胴部上半に煤が付着。

No.	出土位置	器　種	寸法（cm）	器　形	調整・成形	備　考
11	第3・4・5号住居跡南東側斜面	甕形土器	口径16．8cm	口縁部は「く」の字状に緩く外反し、端部は器厚を減じつつ丸くおさめる。	外面；口縁部はタテ方向にハケ目後ナデ。端部はヨコナデ。 内面；口縁部はナデ。端部はヨコナデ。	胎土；長石・石英砂粒を含む。 焼成；良好 色調；赤褐色
12	第3・4・5号住居跡南東側斜面	鉢形土器	口径10．0cm 器高7．9cm	丸底の底部から内湾しながら立ち上がる胴部は、口縁端部に至って器厚を減じつつ丸くおさめる。	外面；口縁部はヨコナデ、胴部以下左ナナメ下方向にハケ目後ナデ。 内面；口縁部はヨコナデ、胴部以下ナデ、指頭圧痕が残る。	胎土；長石・石英砂粒を含む。 焼成；良好 色調；外面黄褐色 内面淡赤褐色
13	第3・4・5号住居跡南東側斜面	蓋形土器	頂部径 6．6cm口縁部径26．6cm 器高8．4cm	胴部は平坦な頂部から「ハ」の字状に開き、口縁端部は平たくおさめる。	外面；口縁部はヨコナデ。胴部はタテ方向にハケ目。頂部はナデ。 内面；口縁部はヨコナデ。胴部はヨコ方向にハケ目後ナデ。	胎土；長石・石英砂粒を含む。 焼成；軟調 色調；外面赤褐色 内面暗黄褐色内面口縁部にわずかに煤が付着。
14	第3・4・5号住居跡南東側斜面	高杯	底径13．6cm	脚柱部は下方へ緩く外湾しながら、裾部は「ハ」の字状に開き、脚端部は平たくおさめている。	外面；脚柱部及び裾部はタテ方向にハケ目。脚端部はヨコナデ。 内面；脚柱部はナデ。裾部はヨコ方向にハケ目後ナデ。脚端部はヨコナデ。	胎土；大粒の長石・石英砂粒を含む。 焼成；軟調 色調；外面黄褐色 内面赤褐色
15	第3・4・5号住居跡南東側斜面	器台形土器	口径21．4cm	鼓形器台の器受部と思われる。筒部から外反しながら立ち上がり、口縁部に至ってさらに大きく外反し、端部は丸くおさめる。	外面；口縁部はヨコナデ、以下体部から筒部にかけてはナデ。口縁部に3条の凹線口縁部と体部の境にヘラ磨き、体部2ケ所に6条の凹線。 内面；口縁部はヨコナデ、以下磨滅が激しく不明。	胎土；長石・石英砂粒を含む。 焼成；良好 色調；赤褐色
16	第3・4・5号住居跡南東側斜面	不明	底径5．4cm	胴部は平底の底部から内湾気味に斜め上方に立ち上がる。	外面；タテ方向にハケ目後ナデ。内面；ヘラ削り。	胎土；長石・石英砂粒を含む。 焼成；良好 色調；赤褐色

No.	出土位置	器　種	寸法（cm）	器　形	調整・成形	備　考
17	第1・2号掘立柱建物跡南側斜面	甕形土器	口径17．0cm	口縁部は「く」の字状に外反し、端部は丸くおさめる。	外面；口縁部はヨコナデ。頸部以下磨滅が激しく不明。 内面；口縁部はヨコナデ。頸部以下ヘラ削り。	胎土；大粒の長石・石英砂粒を含む。 焼成；軟調 色調；外面淡黄褐色内面黒褐色
18	第1・2号掘立柱建物跡南側斜面	壷形土器	口径18．6cm	口縁部は「く」の字状に緩く外反し、端部はわずかに凹んでいる。	外面；口縁端部は強いヨコナデ、口縁部はヨコナデ、頸部以下タテ方向にハケ目後ナデ。 内面；口縁部はヨコナデ、頸部以下ヘラ削り。	胎土；大粒の長石・石英砂粒を含む。 焼成；良好 色調；黄褐色
19	第1・2号掘立柱建物跡南側斜面	鉢形土器	口径28．7cm 底径12．5cm 器高25．6cm	口縁部は「く」の字状に外反し、端部を肥厚させている。 胴部は屈曲点あたりから内湾しながら厚さ約2cmの平底の底部に至る。胴部最大径は屈曲点近くに位置している。	外面；口縁部はヨコナデ。胴部はタテ方向にハケ目後ナデ。底部はナデ。口縁端部に3条の凹線。 内面；口縁部はヨコナデ。頸部以下ヘラ削り。	胎土；大粒の長石・石英砂粒を含む。 焼成；良好 色調；外面淡赤褐色内面暗赤褐色
20	第1・2号掘立柱建物跡南側斜面	鉢形土器	口径28．7cm 底径12．5cm 器高25．6cm	口縁部は「く」の字状に外反し、端部を平たくおさめる。胴部は内湾しながら平底の底部に至る。	外面；口縁部はヨコナデ。胴部上半はタテ方向にハケ目、下半は磨滅が激しく不明。 内面；口縁部はヨコナデ。頸部以下ヘラ削り。	胎土；長石・石英砂粒を含む。 焼成；軟調 色調；赤褐色
21	第1・2号掘立柱建物跡南側斜面	鉢形土器	口径17．4cm	口縁部は「く」の字状に外反し、端部は中央部がやや凹んでいる。	外面；口縁部はヨコナデ。頸部以下ナデ。 内面；口縁部はヨコナデ。頸部以下ナデ。	胎土；長石・石英砂粒を含む。 焼成；軟調 色調；暗赤褐色
22	第1・2号掘立柱建物跡南側斜面	不明	底径5.4cm	胴部は平底の底部から外湾気味に斜め上方に立ち上がる。	外面；荒いナデ。 内面；ヘラ削り。	胎土；長石・石英砂粒を含む。 焼成；軟調 色調；赤褐色

Ⅴ　ま　と　め

１．黒谷遺跡の集落構成及び大型住居跡について

本遺跡からは調査の結果、重複した竪穴式住居跡５軒を確認した。本遺跡の集落構成を立地の状況から概観すると、第１号～第２号住居跡から構成される西側住居跡群、第３号～第５号住居跡及び第１号～第２号掘立柱建物跡及び第１号～第２号テラス状遺構から構成される中央部住居跡群の２群に分けることができる。西側住居跡群は丘陵先端部にある２軒の重複した住居跡で、上深川Ⅱ式後半から上深川Ⅲ式（古）との過渡期の時期に第１号住居跡、第２号住居跡あわせて４回以上の建て替えが想定でき、最後に焼失している。中央部住居跡群のうち丘陵中央部の平坦面にある３軒の重複した住居跡及び２棟の掘立柱建物跡については、上深川Ⅱ式後半から上深川Ⅲ式（古）との過渡期の時期に第３号住居跡、第４号住居跡の計３回以上の建て替えが想定でき、第５号住居跡が上深川Ⅲ式（古）の時期で終わっている。以上のことから、！ 両住居跡群共にほぼ同一期間に４回程度の建て替えを行っていると想定できること、” 本遺跡の使用開始時期から既に両住居跡群が同時併存していた可能性が極めて高いこと、# 住居の規模について両住居跡群ともそれぞれ大から小へ変化していること、$ 本集落は２軒の住居跡と１棟の掘立柱建物跡とテラス状遺構から構成されていたこと、などが考えられる。

次に、集落の規模、住居跡の大きさ、掘立柱建物跡の大きさの三点に留意して黒谷遺跡の集落について考えてみたい。まず第１に、本集落が営まれたと考えられる時期とほぼ同じ時期に営まれたと考えられる周辺の集落には、住居跡が２０軒前後で上深川Ⅰ式から上深川Ⅱ式（古）の時期に至る長期間にわたって存続するものと、住居跡が２～６軒で短期間で廃絶するものとの２種類が見られるが、本集落の場合は後者の小規模なものに属し、しかも集落の構成において他の集落との大きな違いは見られない集落であると考えられる。第２に、本集落とほぼ同じ時期に営まれたと考えられる周辺の集落内の住居跡で規模の大きなものについては、平尾遺跡(1)の径約６ｍの第１号住居跡、下沖３号遺跡(2)の径約５．４ｍの第１号住居跡及び第３号住居跡、下沖５号遺跡(3)の径約５ｍの第２号住居跡、城ノ下Ａ地点遺跡(4)の径６．４ｍ×５．９ｍの第１４号住居跡、小林Ａ地点遺跡(5)の径約５ｍの第７号住居跡、などが挙げられる。本遺跡の場合、第１号住居跡は径約８．２ｍ、第３号住居跡は径約８～９ｍ、第４号住居跡は径約７ｍで、上述した他遺跡の住居跡と比べて大きく隔たった規模を示しており、その性格に疑問が持たれる。ただし上深川Ⅱ式後半から上深川Ⅲ式（古）との過渡期の時期になると、第１号住居跡は径約４．６ｍの第２号住居跡へ、第４号住居跡は径約４ｍ×４．４ｍの第５号住居跡へつくり替えられている。これらの住居跡はともに石内川流域の集落における平均的サイズの住居跡であることから両住居跡群ともに大型の住居から平均的サイズの住居へと住居の縮小化の傾向を示しているといえよう。ところで本遺跡の巨大な住居跡をみると、その内部及びその周辺からは何らかの作業等がなされたことを示す遺物又は祭祀に関係したと考えられる遺物は出土していない。また炉跡などの生活痕跡も確認できたことなどから、巨大な住居の性格としては、本集落が廃絶される時期に営まれていた平均的サイズの住居と同様な性格、すなわち通常の居住などに使用された可能性が高いと考えられる。第３に、掘立柱建物跡の大きさについてであるが、本集落とほぼ同じ時期に

営まれたと考えられる周辺の集落の掘立柱建物跡で規模が大きなものを挙げれば、桁行360cm、梁行240cm、柱穴の径26～38cmである１間×２間の下沖５号遺跡の第５号掘立柱建物跡、桁行220cm、梁行200cm、柱穴の径50cm前後である１間×１間の城ノ下Ａ地点遺跡の第１号掘立柱建物跡などがある。これらに対し、本遺跡の場合、第１号掘立柱建物跡は１間×２間で桁行795～806cm、梁行420～470cm、柱穴は底径４５～５６cmであり、第２号掘立柱建物跡は１間×１間で桁行470～480cm、梁行450～460cm、柱穴は底径48～56cmであり、上述した他遺跡の掘立柱建物跡と比べて柱穴間の距離及び柱穴の大きさともに大きく隔たっている大きさといえよう。

以上のことから！上深川Ⅱ式の後半から上深川Ⅲ式（古）にかけての比較的短期間に営まれた小規模な集落かつ集落構成、出土遺物等から考えれば通常の集落の様相を示している。”上深川Ⅱ式の後半から上深川Ⅲ式（古）の過渡期に２か所に存在したと考えられる２軒の竪穴住居跡及び１棟の掘立柱建物跡は他の遺跡のものとは隔絶した規模を示している、ということが黒谷遺跡の持徴として挙げられる。これらの特徴は、前述する建物の異様な大きさに象徴される、特別な力を持った何らかの集団が黒谷遺跡に生活していたことを想起させ、その場合、谷を挟んで南側に所在する集団墓地である平尾遺跡の存在は、その集団の性格を考察する上で示唆的である。また代々、巨大な住居跡を造りつづけた集団が生活した黒谷遺跡において、古墳時代初頭とも言われるその最後の時期に住居跡が著しく縮小することは、その時期に、石内川流域の、特に黒谷遺跡周辺の集落間の関係に何らかの変化があったことを示しているものと推定され、興味を引かれる。

２．黒谷遺跡出土のいわゆる「コシキ形土器」について

黒谷遺跡の出土遺物のなかで、他の弥生土器に比べて極めて大形でしかも底がない円筒状の器形をした土器が見られる。この特異な器形をした土器は焼失住居である第２号住居跡内から出土しており、しかもその出土状態から判断して、本土器は小さくすぼまる方を上方にし、大きくひろがる方を下方にして炉をすっぽりと覆う位置で使用されていたことが推定できる。また本土器を詳細に観察してみると、体部内面の煤の付着状態および体部外面に便用痕と考えられる摩擦痕がないことなどから、本土器は火に関係する道具でしかも吊り下げられたのではなく、置かれて使用された可能性が高いと考えられる。以上のことから本土器は小さくすぼまる方を上方にし、大きくひろがる方を下方にして炉をすっぽりと覆う位置に置かれて使用された可能性が極めて高いと考えられる。

さて本土器と器形が類似している完形の土器が石内川流域に位置する小林Ａ地点遺跡および串山城遺跡(6)のいずれも住居跡内から出土している。本土器とこれらの土器を比較検討しつつ、本土器を含めた石内川流域の遺跡から出土した土器について若干の考察

出土場所	出土位置	器高（cm）	口縁部径（cm）	裾部径（cm）	重量（kg）	突帯	煤の付着状態	共伴遺物の編年的位置＜上深川様式＞
黒谷遺跡 第２号住居跡	中央部付近床面	61.2	9.2	35.0	11.0	無	内面屈曲部あたりからその上方にかけて付着。内外面とも屈曲部以下にごくわずかに付着。	弥生時代後期後葉～終末 ＜II式＞
小林A地点遺跡 第７号住居跡	北側及び放蕩側の壁際床面	63.5	8.6	31.3	6.4	有	内面上半に付着。 外面ごくわずかに付着。	弥生時代後期中葉～古墳時代初頭 ＜II式～III式（古）＞
串山城遺跡 第１号住居跡	南東側の壁近く床面	58.4	11.2	28.3	5.6	有	内面上半に付着。	弥生時代後期後葉～終末 ＜II式＞

を加えてみたい。まず本土器を含めた３つの土器の寸法等について下記のような表としてまとめてみたが、上述した本土器の使用時における推定される形態から小さくすぼまる方を口縁部とし、大きくひろがる方を裾部として記載する。

左のページの表などを参考にしながら、３つの土器の共通する持徴を挙げると以下のとおりである。

１）器高が60cm前後、口縁部の径が10cm前後、裾部の径は本土器が若干大きいものの概ね30cm前後の土器である。

２）底がない円筒状の器形である。

３）体部下半において「ハ」の字状に大きくまたは若干ひろがっている。

４）煤の付着については、いずれも体部内面に確認でき、「ハ」の字状にひろがる屈曲部あたりから上方にかけてかなり付着が見られる。また外面については、いずれの土器も裾部にごくわずかに確認できるだけである。

５）体部外面に使用痕と考えられる摩擦痕が見られない。

６）出土場所が通常の住居跡内である。

７）共伴した遺物から、弥生時代後期後葉から古墳時代初頭にかけての時期のものと考えられる。

これらの土器については、それぞれの土器に見られる固有の持徴もあるものの上述の１）、２）、３）の共通する持徴などから、同様の器形をもつ同器種の土器と考えることができる。さらにそれぞれの土器の出土状態をみると、本土器と他の２つの土器とでは違いが見られるもののいずれも通常の住居跡内から出土している。またこれらの土器については破片が幾重にも折り重なった状態や広範囲にわたって散乱した状態とは思えないことから、住居焼失時または放棄時において住居外から住居内に投げ込まれたり、高い位置から落下したとは考えにくい出土状態である。これらのことから、住居焼失時点または放棄時点においていずれの土器も住居内にあったことが窺える。さらに共通する特徴のなかの４）、５）などから推定すると、本土器以外の他の２つの土器についても本土器と同様な形態で使用された可能性が高いと考えられる。

以上のことから石内川流域から出土した大形でしかも底がない円筒状の器形をもつ３つの土器についてまとめてみると、

１）製作および使用時期については、弥生時代後期後葉から古墳時代初頭までの時期と考えられる。

２）いずれも内面に煤の付着が確認されることなどから、住居内の炉で使用された道具と考えられる。

３）小さくすぼまる方を上方にし、大きくひろがる方を下方にして吊り下げずに炉に置いて使用された可能性が高いと考えられる。

ということがいえる。

このほか石内川流域では、平尾遺跡からも本土器と類似する器形をもつと考えられる土器片が出土している。口縁部と考えられるこの土器片は、口径が8.8cmと本土器とほぼ同じであるが、外面に断面三角形の突帯を付けている。内面については端部から約８cm指によるナデを施した後、ヨコ方向にハケ目調整しているのが確認できることからこの部分の仕上げの丁寧さが感じられる。煤の付着については、内外面ともに認められない。またこの土器片の出土位置は第２号住居跡と北側テラス状遺構との間の斜面で、遺跡内

の墳墓群からかなり離れた位置であることから、墳墓ではなく集落に関係する土器の可能性が高いと考えられる。尚、平尾遺跡で確認された集落跡は、弥生時代後期中葉から後葉にかけての時期に営まれたと考えられていることから、この土器片も同時期のものと思われる。

さてこれら以外に本土器と類似する器形をもつと考えられる土器片の出土例を石内川・八幡川流域の遺跡に求めるならば、八幡川西岸の丘陵上に位置する白禿遺跡(7)から出土したものがある。この土器片は断面長方形の突帯をつけた口縁部と考えられており、その口径は8.2cmである。煤の付着については未確認のため不明である。またこの土器片は調査区内の表土から出土しているため時期は明確にしがたいが、この遺跡で確認された集落跡が弥生時代後期後葉を中心とした時期に営まれたと考えられていることから、この土器もこの時期に使用された可能性が高いと思われる。

次に太田川流域における本土器と類似した器形をもつと考えられる土器の出土例をみると、西岸の丘陵上に位置する芳ケ谷遺跡(8)の第３号住居跡内から出土した完形の土器が挙げられる。この土器は器高35.3cm、口径8.8cm、裾部径30.4cm、重量5.4kgで、放棄された住居跡内から出土し、出土位置は南東側の壁近くである。この土器は壁方向に口縁部を、中央部方向に裾部を向けて横になった状態で出土しており、部分的にヒビは入っていたものの割れずにほぼ原形を留めている。共伴する土器からこの土器は、弥生時代後期終末から古墳時代初頭にかけての時期のものと考えられている。この芳ケ谷遺跡出土の土器と石内川流域出土の土器とを比較すると、！住居跡内からの出土である、”口縁部及び裾部の径がほぼ同じである、＃体部内面の上半に煤の付着が認められる、等が共通点として挙げられる。これらのことから石内川流域出土の土器と芳ケ谷遺跡出土の土器は、器高こそかなり違うもののほぼ同様の意図をもって製作・使用された土器の可能性が高いといえよう。またそれぞれの土器の時期をみると石内川流域出土の土器が弥生時代後期後葉から終末を中心とした時期のものに対し、芳ケ谷遺跡出土の土器は弥生時代後期終末から古墳時代初頭にかけての時期のものであり、時期的にみて芳ケ谷遺跡出土の土器が石内川流域出土の土器に比べて新しい時期のものであるといえる。

ところで本土器のような大形でしかも底がない円筒状の器形をもち、さらに一対または二対の半環状の把手を体部に装着した土器に「甑形土器」あるいは「コシキ形土器」と呼称される土器がある。（以下、これらの土器をまとめて甑形土器とする。）現在までの甑形土器の分布をみると、山陰地方を中心として東は大阪府利倉西遺跡(9)、西は福岡県那珂遺跡(10)、南は愛媛県宮前川遺跡(11)までの広範囲に及んでいる。また広島県内の分布については、三次市周辺で３例（三次市内(12)、高田郡高宮町寸志名遺跡(13)、庄原市永宗遺跡(14)）、世羅郡世羅町土居丸遺跡(15)で確認されている。次に甑形土器の系譜についてこの土器の分布の中心である山陰地方でみると、鳥取県天王原遺跡(16)第１号住居跡から出土した甑形土器が初源的な形態をもつといわれており、弥生時代後期中葉の時期のものとされている。またこの土器とほぼ同時期と考えられるものに島根県勝負遺跡(17)第１号住居跡から出土した甑形土器がある。その後、甑形土器は弥生時代後期後葉から古墳時代初頭の時期については島根県からごくわずか出土している(18)だけで、鳥取県からの出土はほとんど報告されていない。ところが古墳時代前期になると住居跡内からの出土を中心として甑形土器の出土数が急激に増加しているが、中期初頭の時期をもってほとんど出土しなくなる。この山陰地方出土の甑形土器と石内川流域出土の土器とを

比較してみると、山陰地方出土の甑形土器については、いずれの土器も体部に把手を装着させるという形態的特徴を備えている。この把手のほとんどが体部に穿孔を施した後、差し込んで接合されていることから単に装飾等のためではなく、土器に加重をかけても耐えうるように強固に取り付けたと考えられることから、製作時においてこの把手を利用して土器を吊り下げようとした意図が窺える。これに対し本土器をはじめとする石内川流域出土の土器には把手は装着されておらず、吊り下げることを意図して製作されたとは考えにくいことから、置いた状態で使用された可能性が高いと思われる。以上のことから石内川流域出土の土器と山陰地方出土の甑形土器とは、器形において大きな相違点が認められるため、それぞれの土器の機能についても異なる可能性があると考えられよう。

さて石内川流域出土の土器と同様に把手が装着されていない円筒状の器形をした土器が愛媛県宮前川遺跡から３点出土している。宮前川遺跡出土の土器は器高43.2～44.3cm、口径10.7～11.4cm、裾部径12.1～13.3cm、重量2.0～2.1kgで、口径と裾部径がほぼ同寸法でしかも最大径が体部中位にあるということが特徴として挙げられる。またこれらの上器は古墳時代初頭から前期の時期のものと考えられている。宮前川遺跡出土の土器と石内川流域出土の土器を比較すると、口径はほぼ同じものの裾部径が大きく違っているうえ、体部最大径が裾部にある石内川流域出土の土器に対し、宮前川遺跡出土の土器は体部中位にあることなどから、石内川流域出土の土器と宮前川遺跡出土の土器が同様のものとは考えにくい。

さらに山陰地方や愛媛県以外の地域から出土した甑形土器についても、いずれも体部に把手を装着しているほか、時期的にみていずれも石内川流域出土のものより新しい時期のものである。また広島県内出土の土器をみてもいずれも体部に把手を装着しているうえ、色調、胎土なども石内川流域出土の土器とは大きく異なっている。しかも石内川流域出土のものよりいずれも新しい時期のものと考えられる。これらのことから、「甑形土器」あるいは「コシキ形土器」と呼称される土器と石内川流域出土の土器が同様のものとは考えにくく、本土器を含めた石内川流域出土の土器は、他地域から特に山陰地方から搬入されたものではなく、この地域において独自に製作・使用された在地製の土器である可能性が極めて高いと考えられる。

以上のことをまとめてみると、石内川流域出土の３つの土器は弥生時代後期後葉から古墳時代初頭にかけての時期にこの地域で独自に製作されたもので、体部に把手が装着されていないことなどから吊り下げることを意図して製作された可能性は極めて低いと考えられる。また使用時における形態は小さくすぼまる方を上方にし、大きくひろがる方を下方にして吊り下げずに炉をすっぽりと覆う位置に置いていたと考えられる。ところで、これらの土器が出土した住居跡は集落内の他の住居跡に比べて特別際立った形態をもつものではないし、住居跡内からの出土数はいずれも１個体で複数出土した住居跡は確認されていない。さらに弥生時代後期後葉から古墳時代初頭にかけての時期に営まれたと考えられる石内川流域のすべての集落からこれらの土器が出土しているわけでもなく、しかもこの地域での出土個体数は極めて少ない。これらのことかろこれらの土器が集落内に１個体あれば事足りる道具なのか、あるいは非日常的な道具で特別な場合のみ使用するものなのかのいずれかであるの可能性が高いと思われるが、現在のところ明確にしえない。このことからこれらの土器の使用時における機能すなわち製作目的につ

いては、今回の資料だけでは明確な結論を出すには至らず、本報告書では本土器をはじめとする石内川流域出土の土器についての使用形態を明確にするにとどめ、これらの土器の機能については今後の調査に期待し、さらに資料の増加を待って検討を加えてみたい。

注＞

（1）財団法人広島市歴史科学教育事業団『平尾遺跡発掘調査報告』１９９３

（2）広島市教育委員会「下沖３号遺跡」『一般県道原田五日市（石内バィパス）道路改良工事事業地内遺跡群発掘調査報告』１９８８

（3）広島市教育委員会「下沖５号遺跡」『注（２）文献と同じ』１９８８

（4）財団法人広島市歴史科学教育事業団『城ノ下Ａ地点遺跡発掘調査報告』１９９１

（5）広島市教育委員会「小林Ａ地点遺跡」『小林Ａ・Ｂ地点遺跡発掘調査報告』１９９０

（6）平成５・６年度に財団法人広島市歴史科学教育事業団が調査を実施した。

（7）財団法人広島県埋蔵文化財センター「白禿遺跡」『月見城遺跡』１９８７

（8）広島市教育委員会「芳ケ谷遺跡」『広島経済大学構内遺跡群発掘調査報告』１９８４

（9）豊中市教育委員会「利倉西遺跡」『第１８回埋蔵文化財研究会弥生時代後期から古墳時代初頭のいわゆる山陰系土器について（資料)』１９８５

(10) 福岡市教育委員会『那珂遺跡一那珂遺跡群第８時調査の報告一』１９８７

(11) 財団法人愛媛県埋蔵文化財センター『宮前川遺跡一小中河川改修事業埋蔵文化財調査報告書』１９８６尚、宮前川遺跡出土のものについては、財団法人愛媛県埋蔵文化財センター谷若倫郎氏、作田一耕氏、愛媛県歴史民俗資料館川原学氏のご厚意により実見し、ご教示いただいた。

(12) 桑原隆博「三次市内出土の所謂『山陰型の甑形土器』について」『芸備』第１０集１９８０

(13) 広島県教育委員会「寸志名遺跡」『中国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財調査報告（２)』１９７９

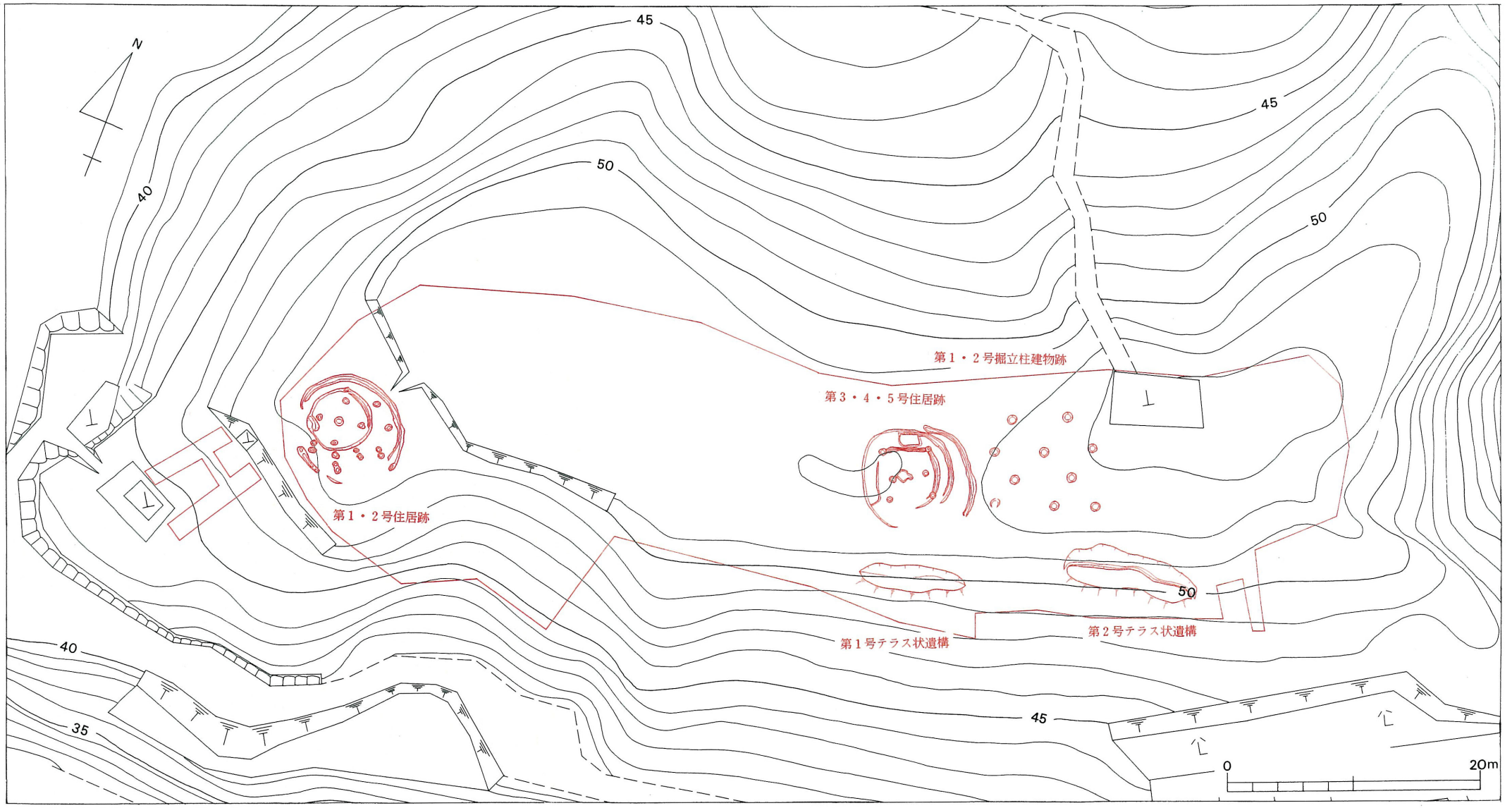
(14) 財団法人広島県埋蔵文化財センター「永宗遺跡」『西山・小和田・永宗国道１８３号線改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』１９８２　尚、永宗遺跡出土のものについては、財団法人広島県埋蔵文化財センター桑原隆博氏のご厚意により実見し、ご教示いただいた。

(15) 世羅町教育委員会『土居丸遺跡Ｉ』１９９３

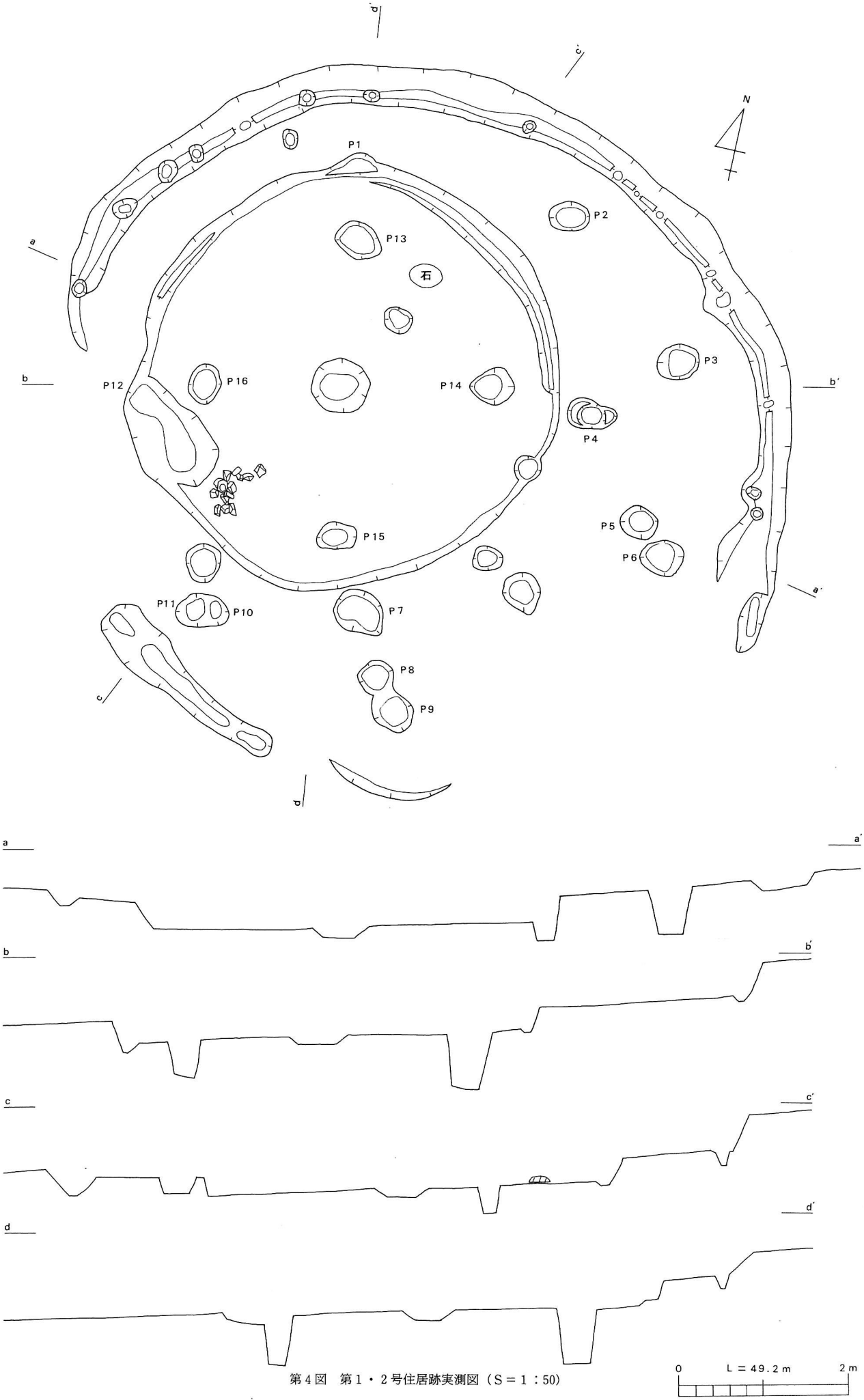
(16) 天王原遺跡出土のものについては、米子市教育委員会杉谷愛象氏、下高瑞哉氏のご厚意により実見し、ご教示いただいた。

(17) 島根県教育委員会「勝負遺跡」『一般国道９号線松江道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書ｌＸ』１９９２尚、勝負遺跡出土のものについては、島根県古代文化センター松本岩雄氏のご厚意により実見し、ご教示いただいた。

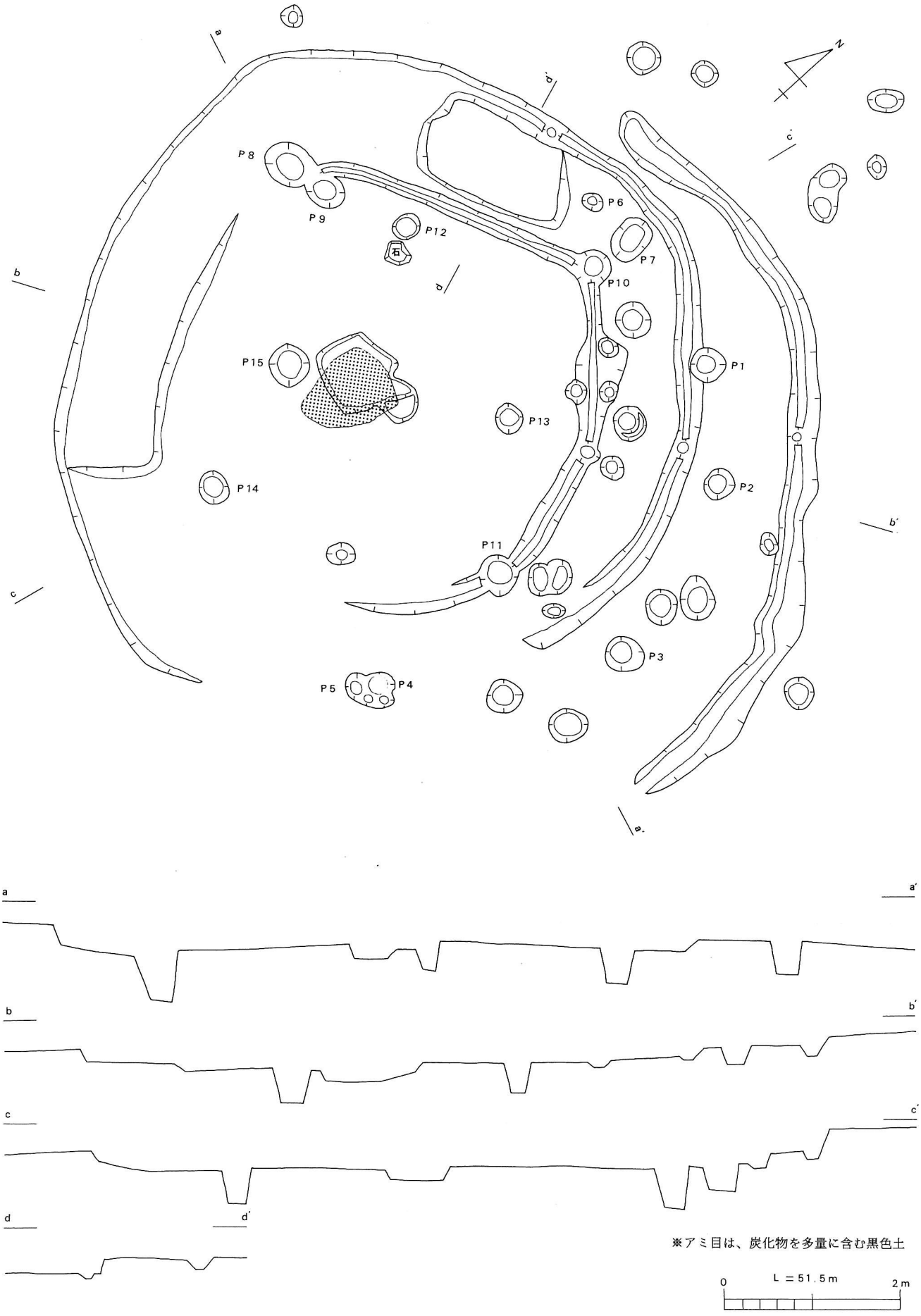
(18) 現在管見するところによれば、平所遺跡第１号住居跡内出土のもの１例のみである。島根県教育委員会「平所遺跡『国道九号バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ｉ』１９７６尚、平所遺跡出土のものについては、島根県立八雲立つ風土記の丘資料館大谷晃二氏のご厚意により実見し、ご教示いただいた。



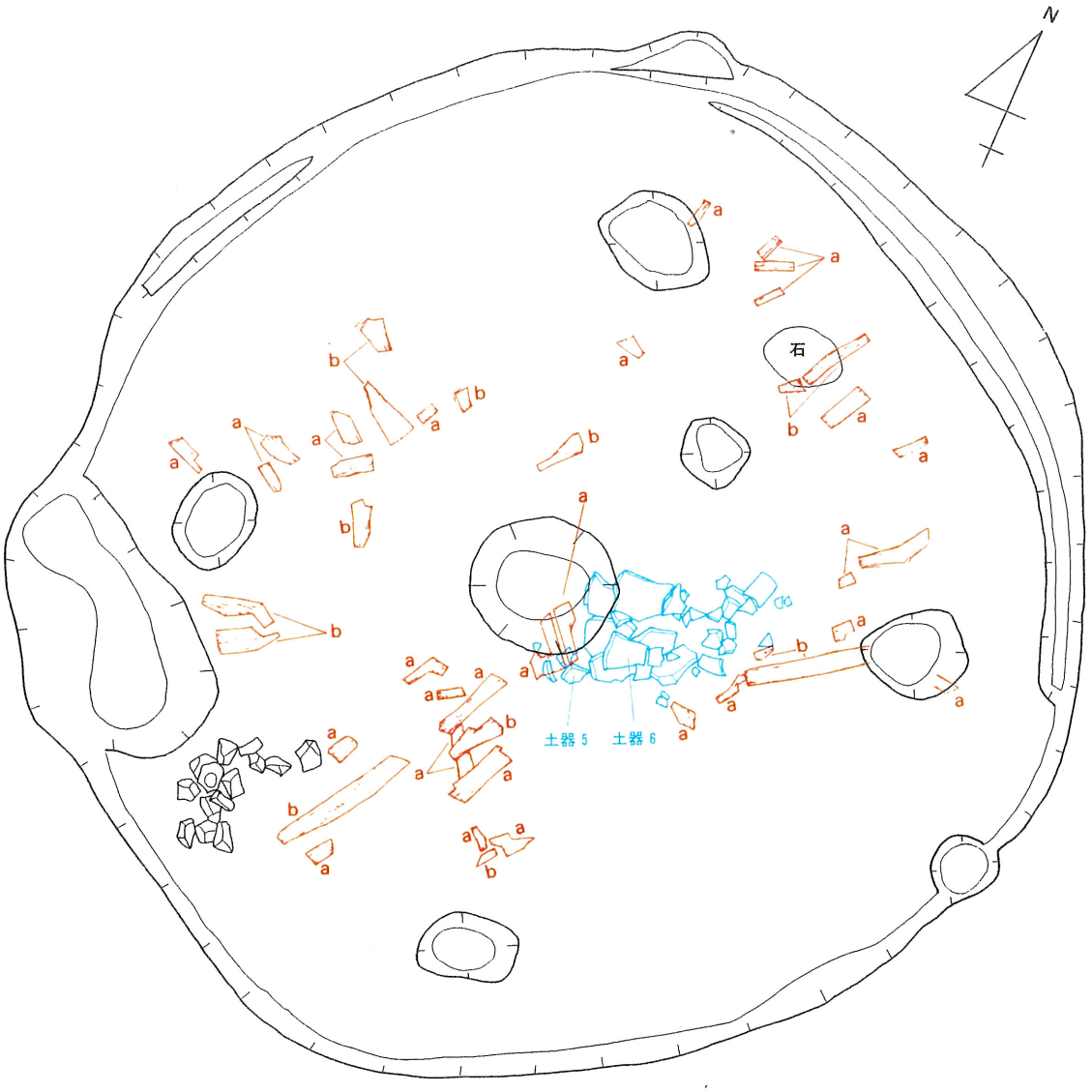
第３図　黒谷遺跡遺構配置図（Ｓ＝１：300）



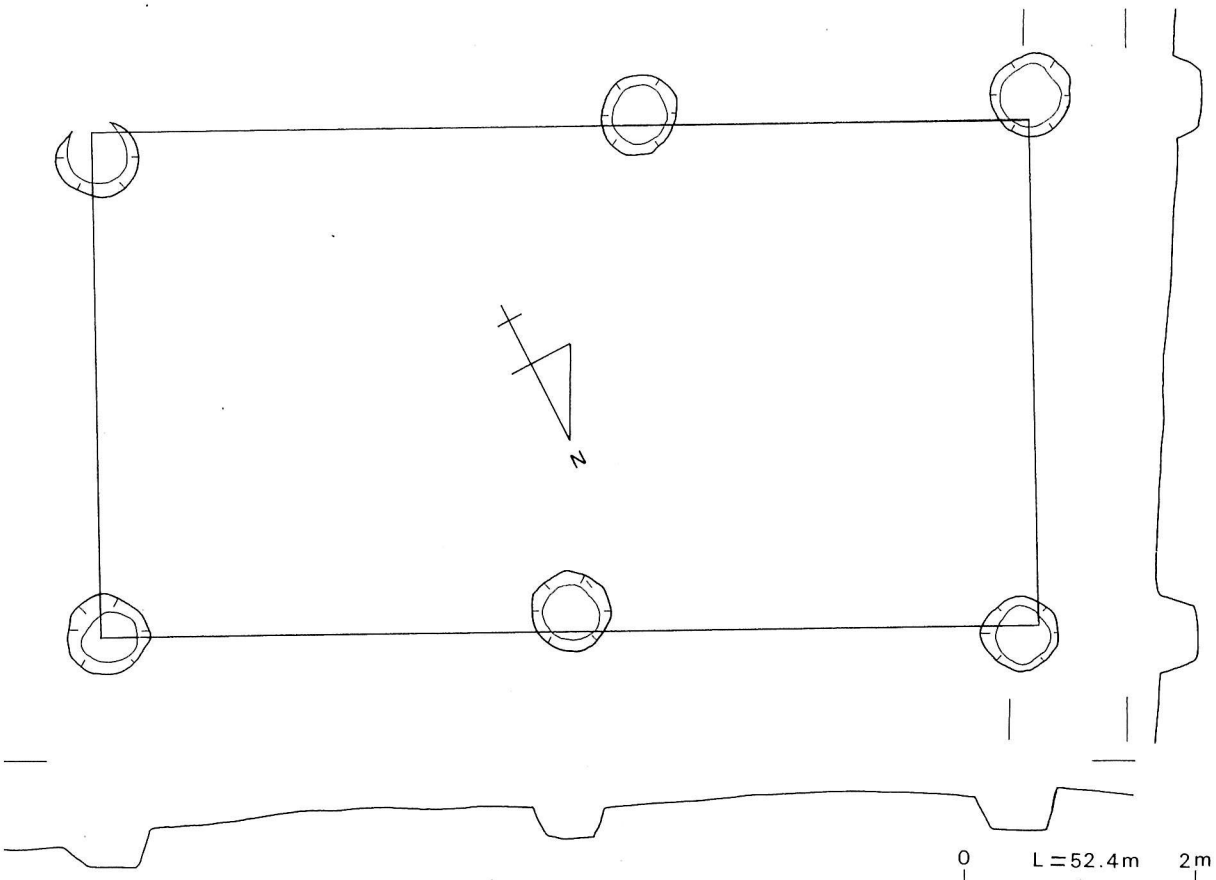
第4図　第1・2号住居跡実測図（S＝1：50）



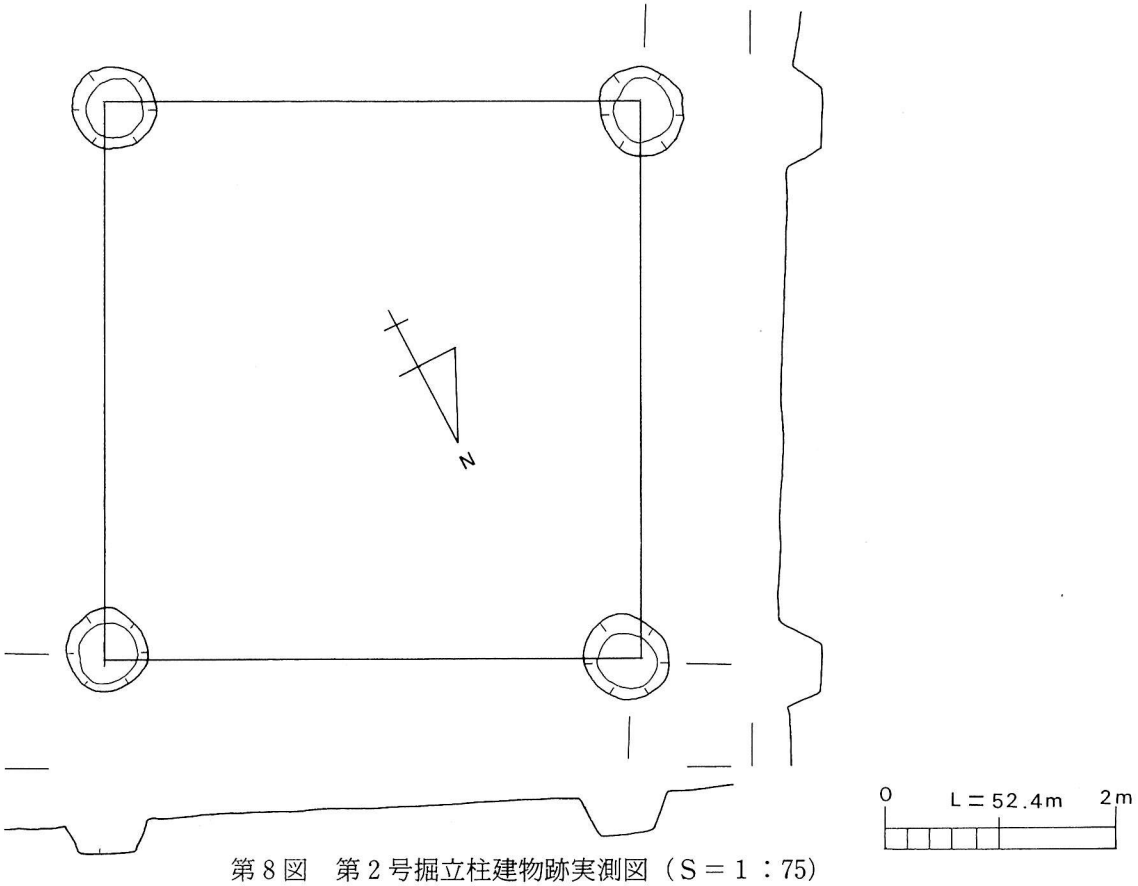
第5図　第3・4・5号住居跡実測図（S＝1：50）



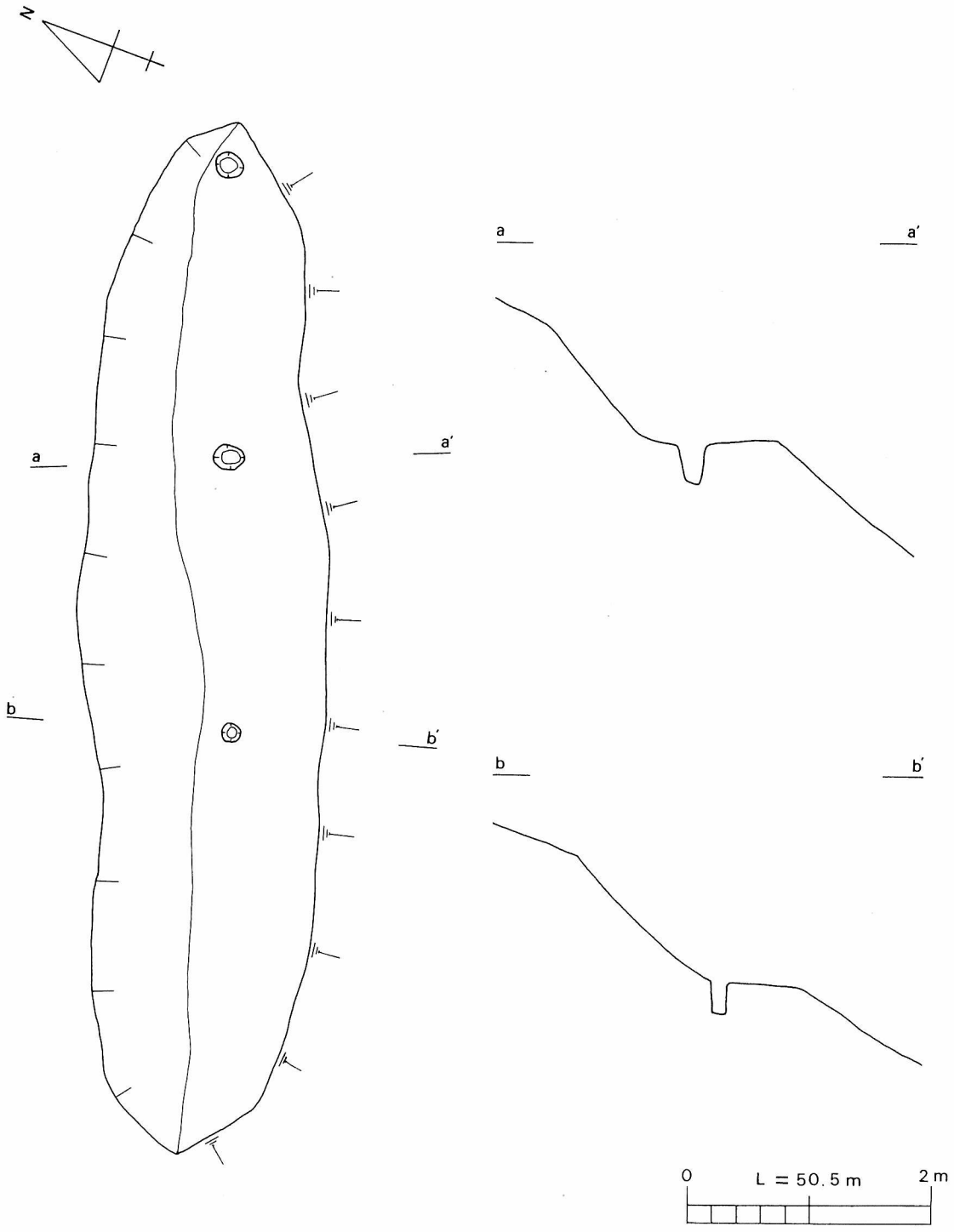
第6図　第2号住居跡土器・炭化材実測図（S＝1：40）



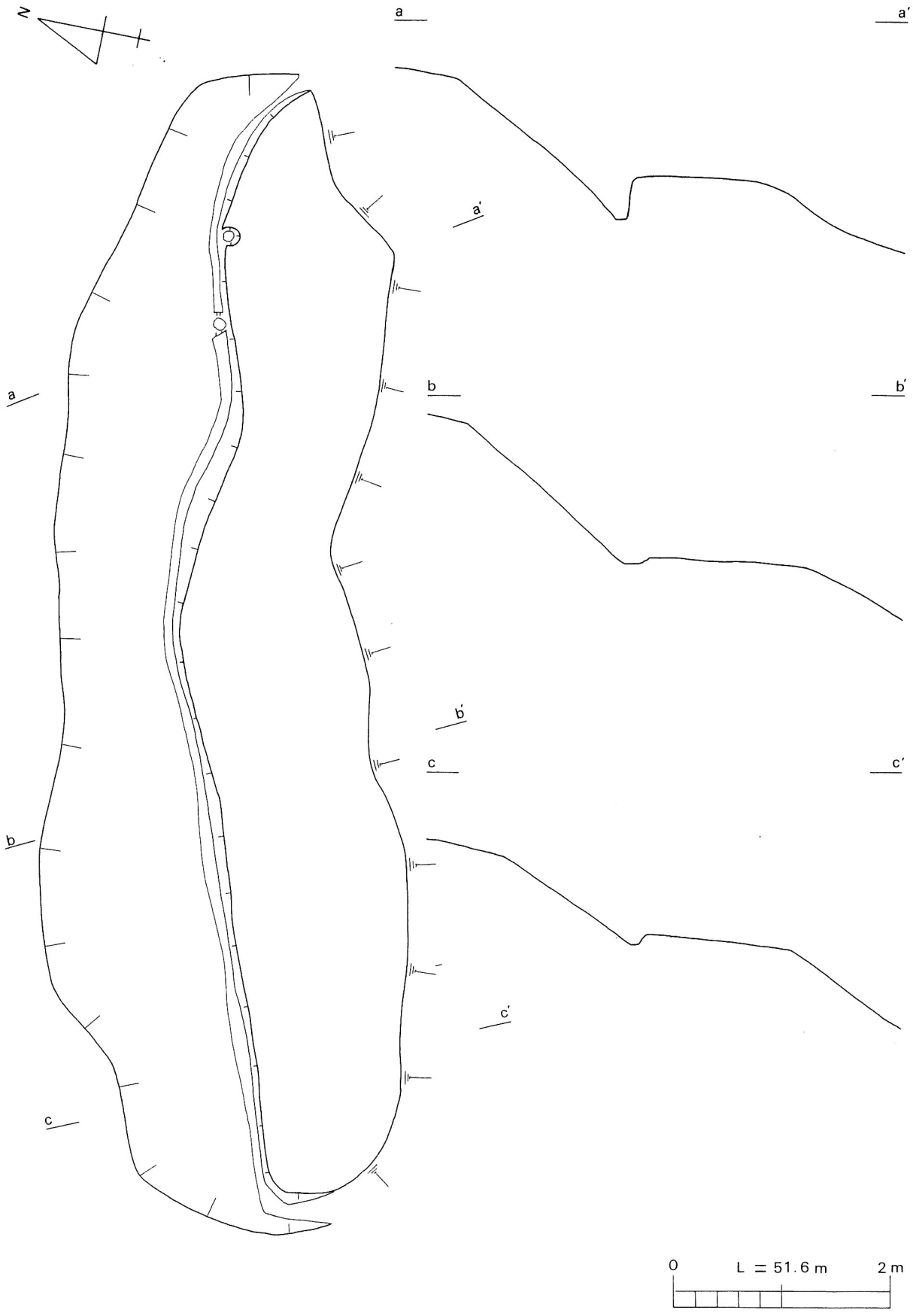
第７図　第１号掘立柱建物跡実測図（Ｓ＝１：75）



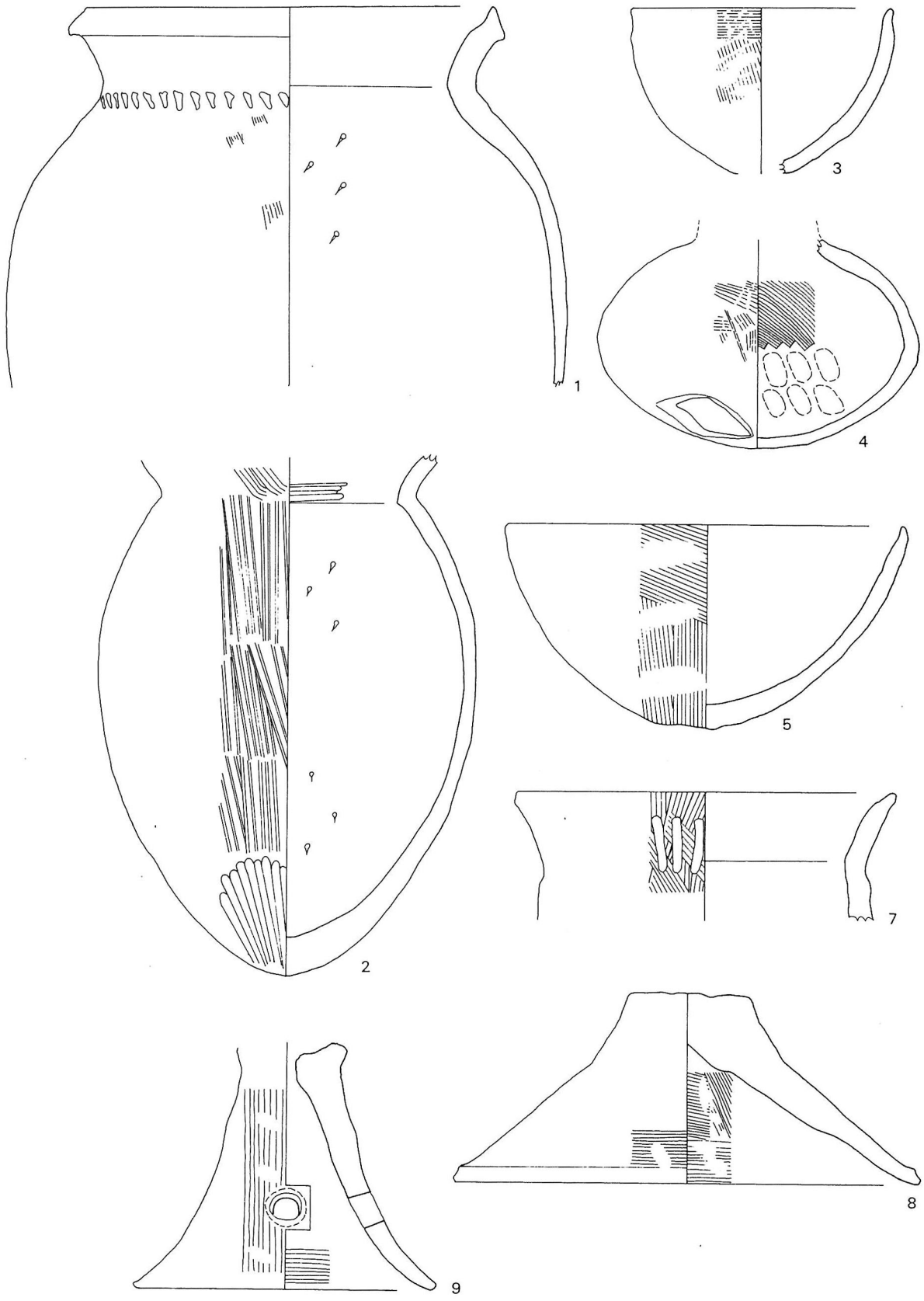
第８図　第２号掘立柱建物跡実測図（Ｓ＝１：75）



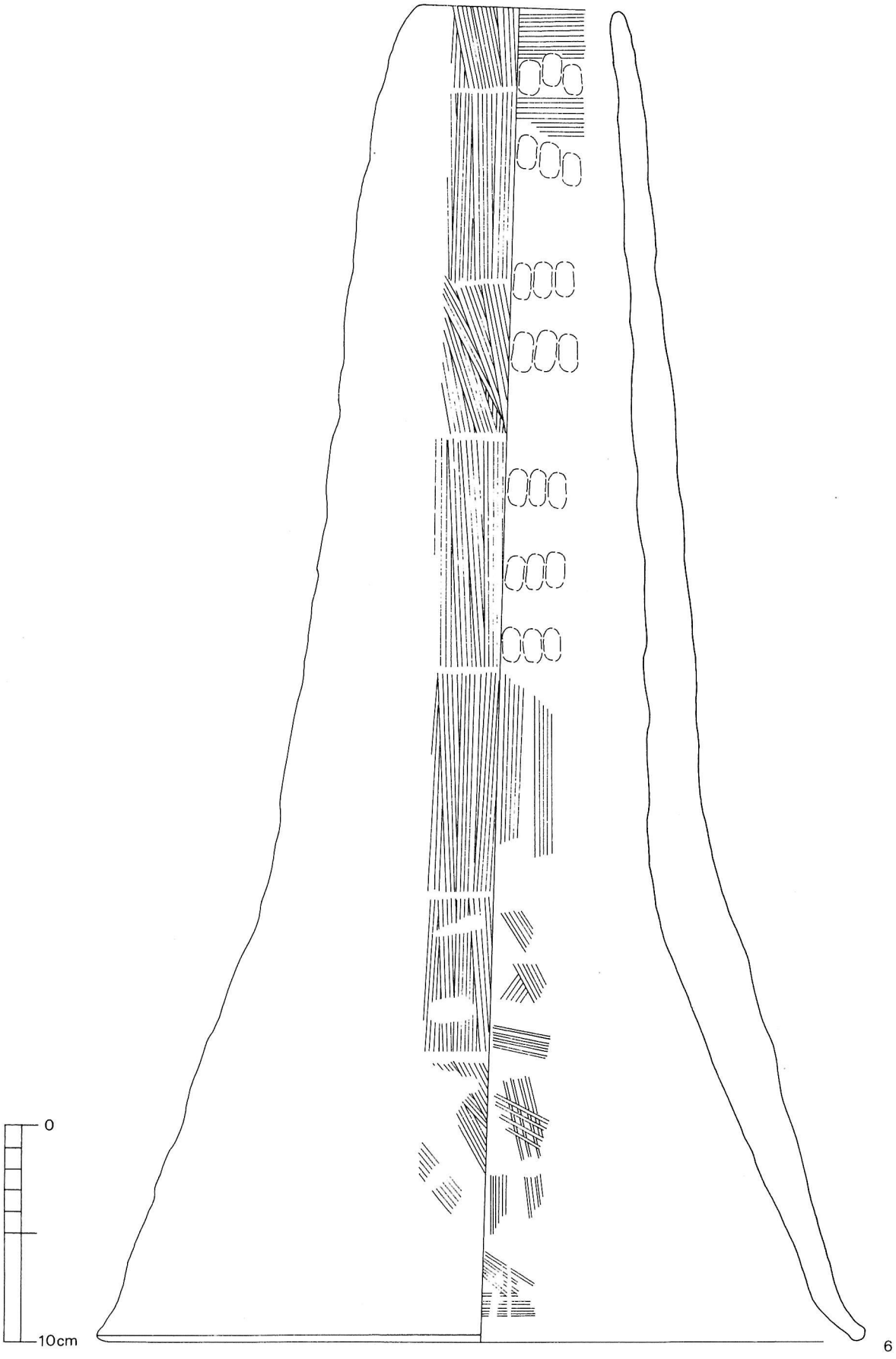
第9図　第1号テラス状遺構実測図（S＝1：60）



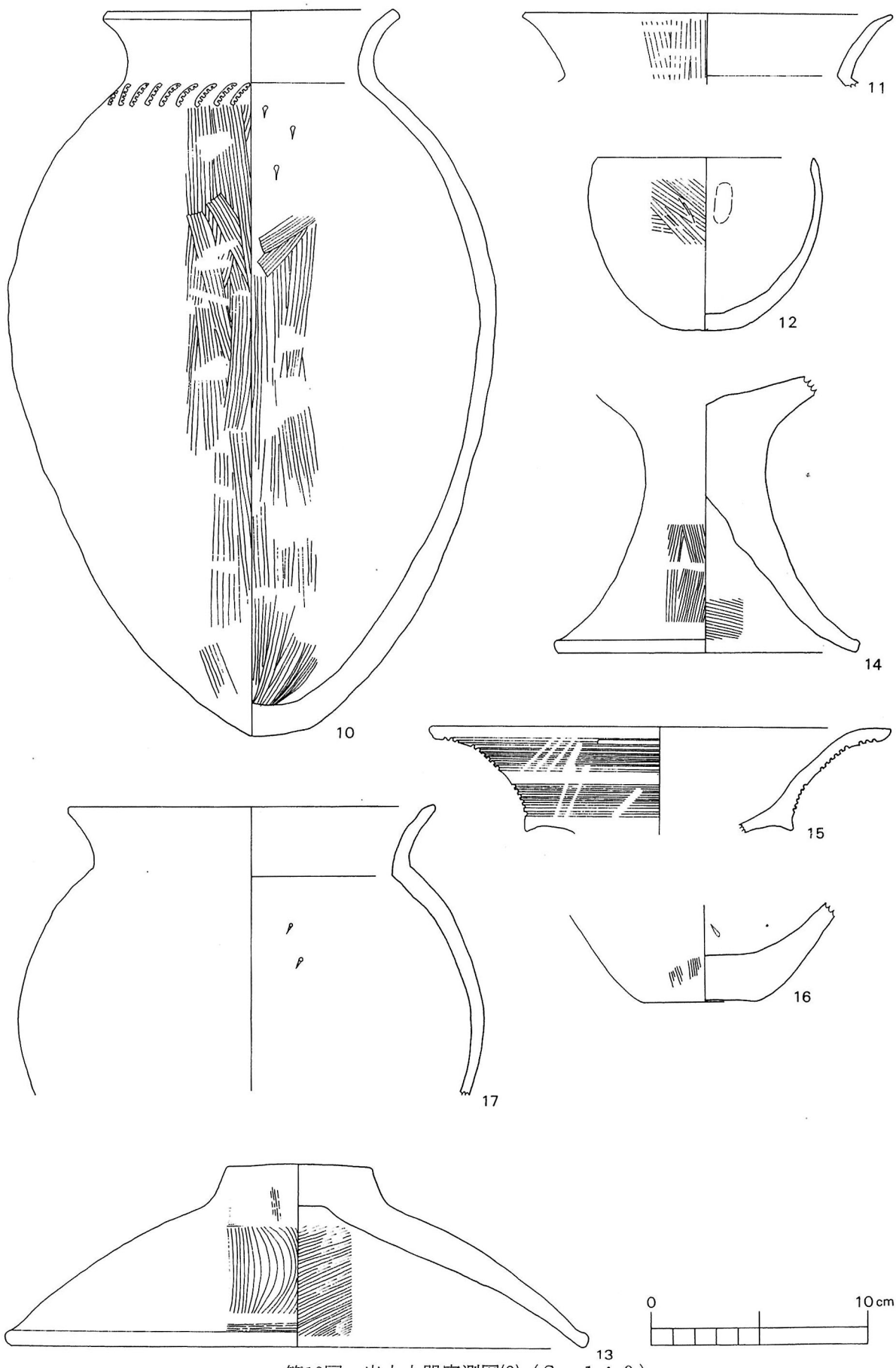
第10図　第２号テラス状遺構実測図（Ｓ＝１：60）



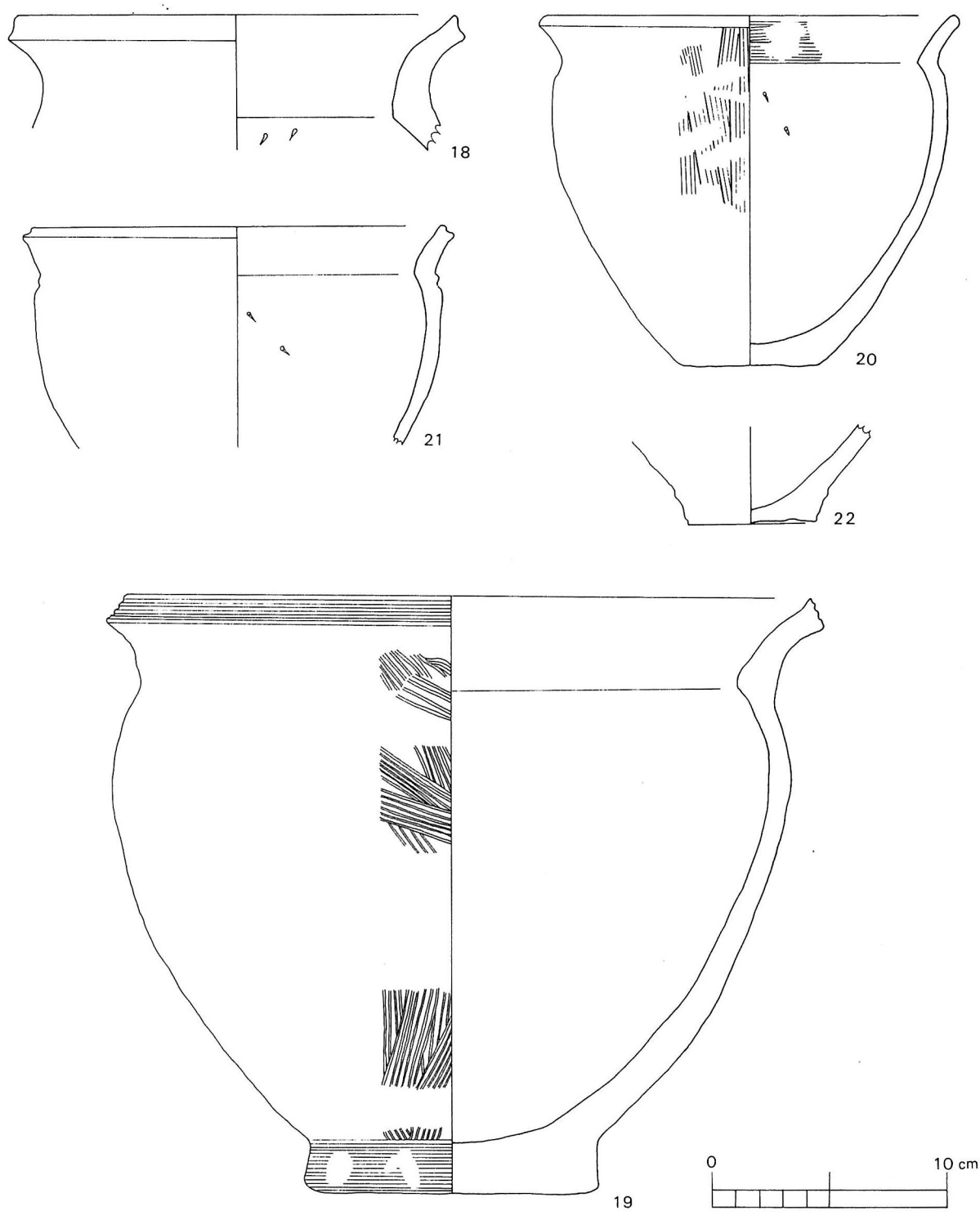
第11図　出土土器実測図(1)（S＝1：3）



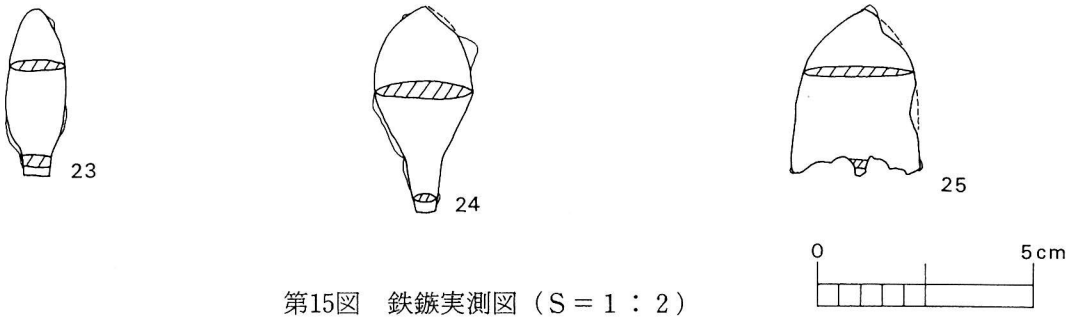
第12図　出土土器実測図(2)（S＝1：3）



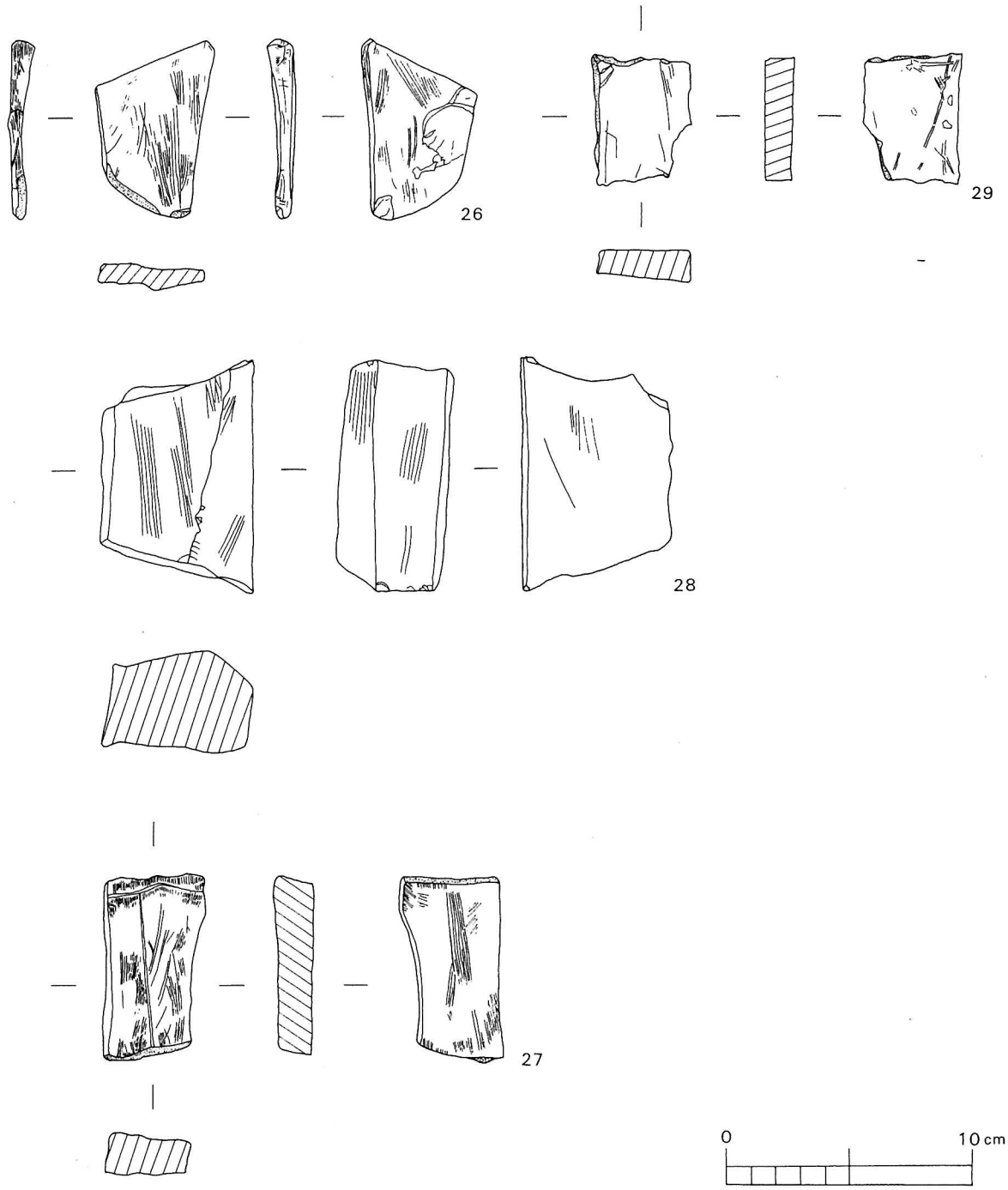
第13図　出土土器実測図(3)（S＝1：3）



第14図　出土土器実測図(4)（S＝1：3）



第15図　鉄鏃実測図（S＝1：2）



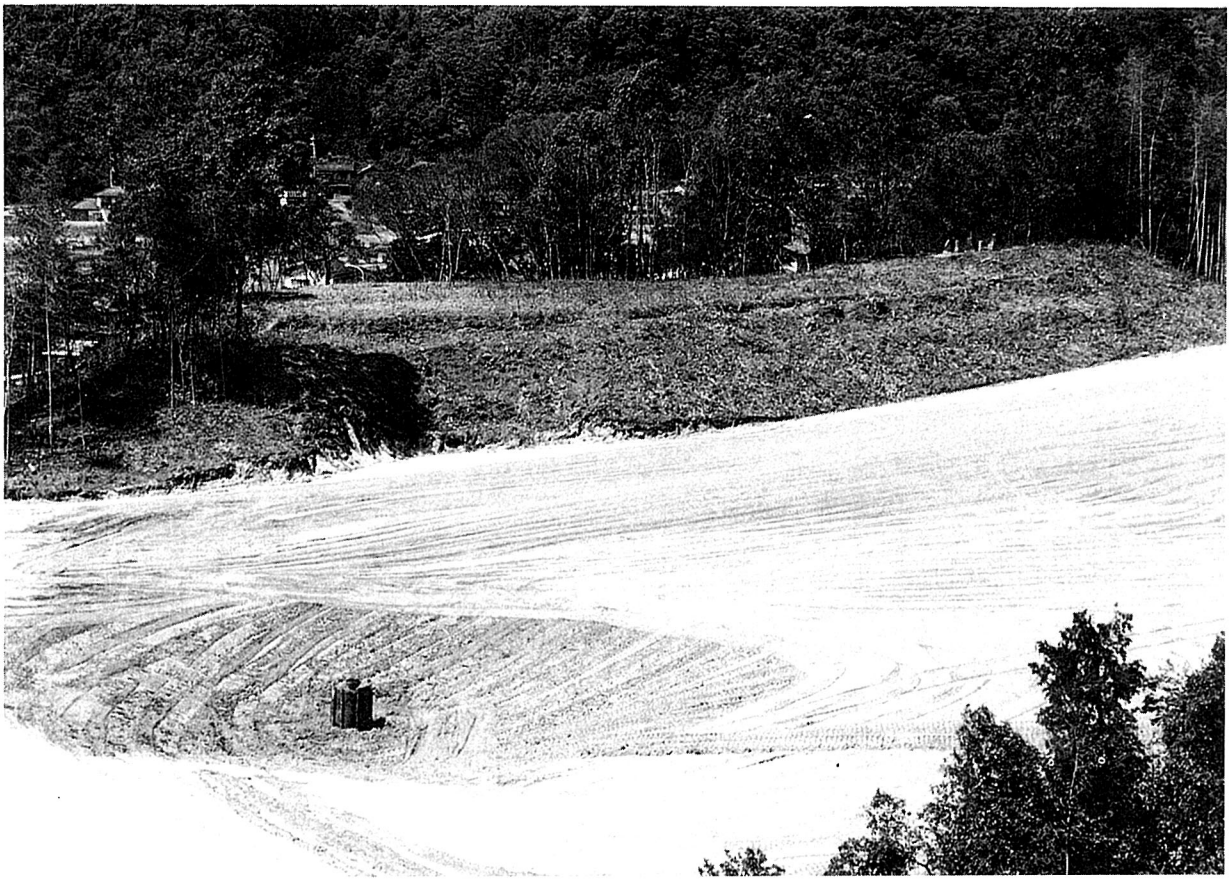
第16図　砥石実測図（S＝1：3）

図　　版



黒谷遺跡遠景（調査後・東から・航空写真）

図版 2



a．黒谷遺跡全景（調査前・平尾遺跡から）



b．黒谷遺跡全景（調査後・南から・航空写真）

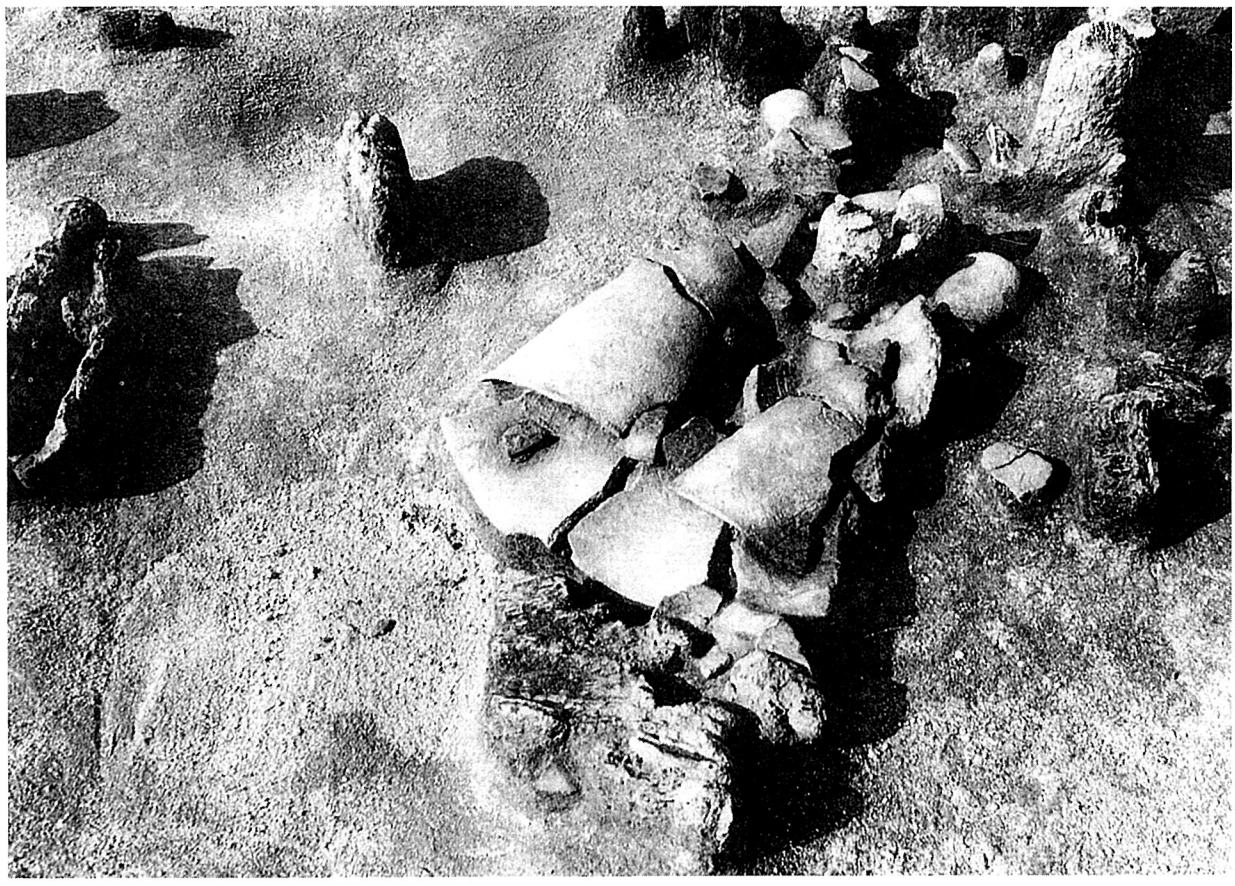


a．第１・２号住居跡



b．第２号住居跡　土器及び炭化材出土状況

図版 4



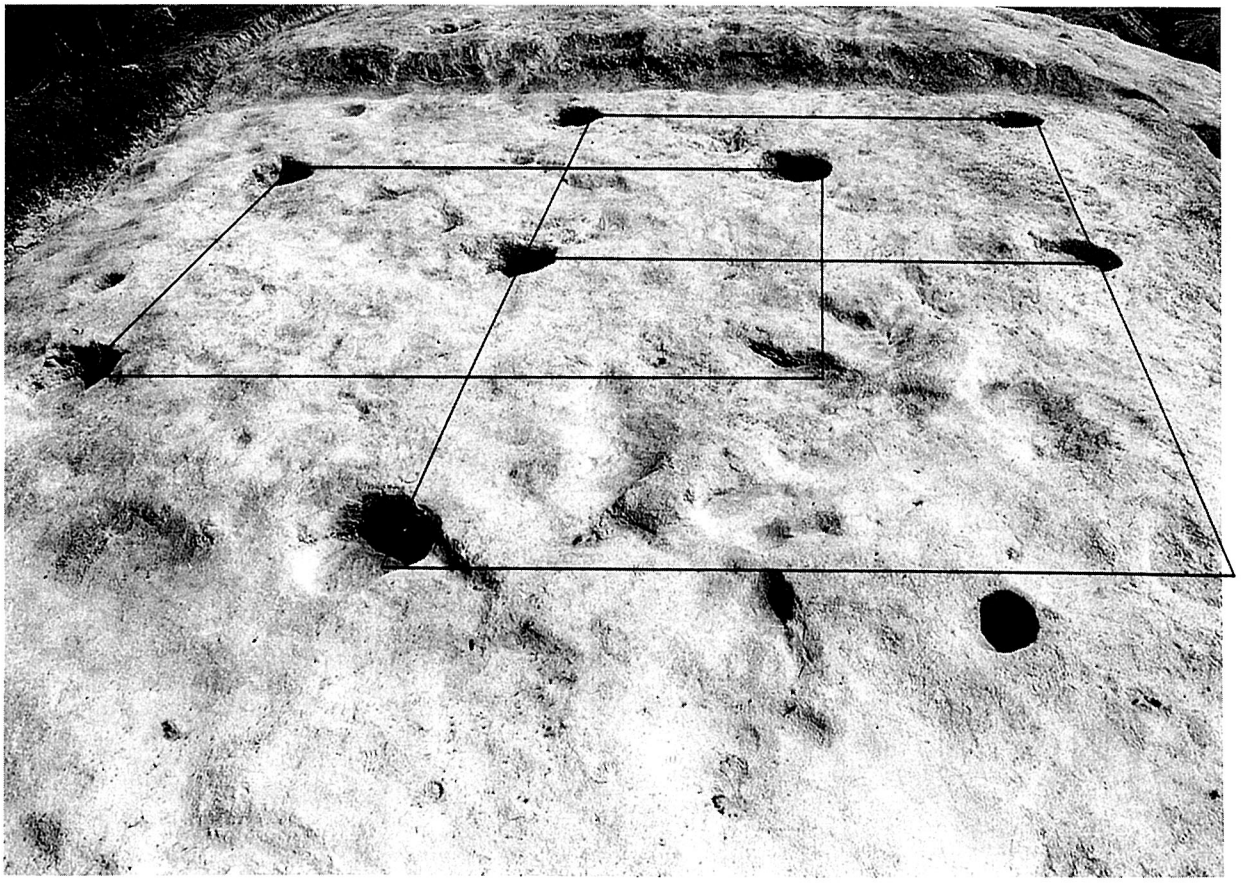
a．第 2 号住居跡　土器出土状況



b．第 3 ・ 4 ・ 5 号住居跡



a．第3・4・5号住居跡及び第1・2号掘立柱建物跡

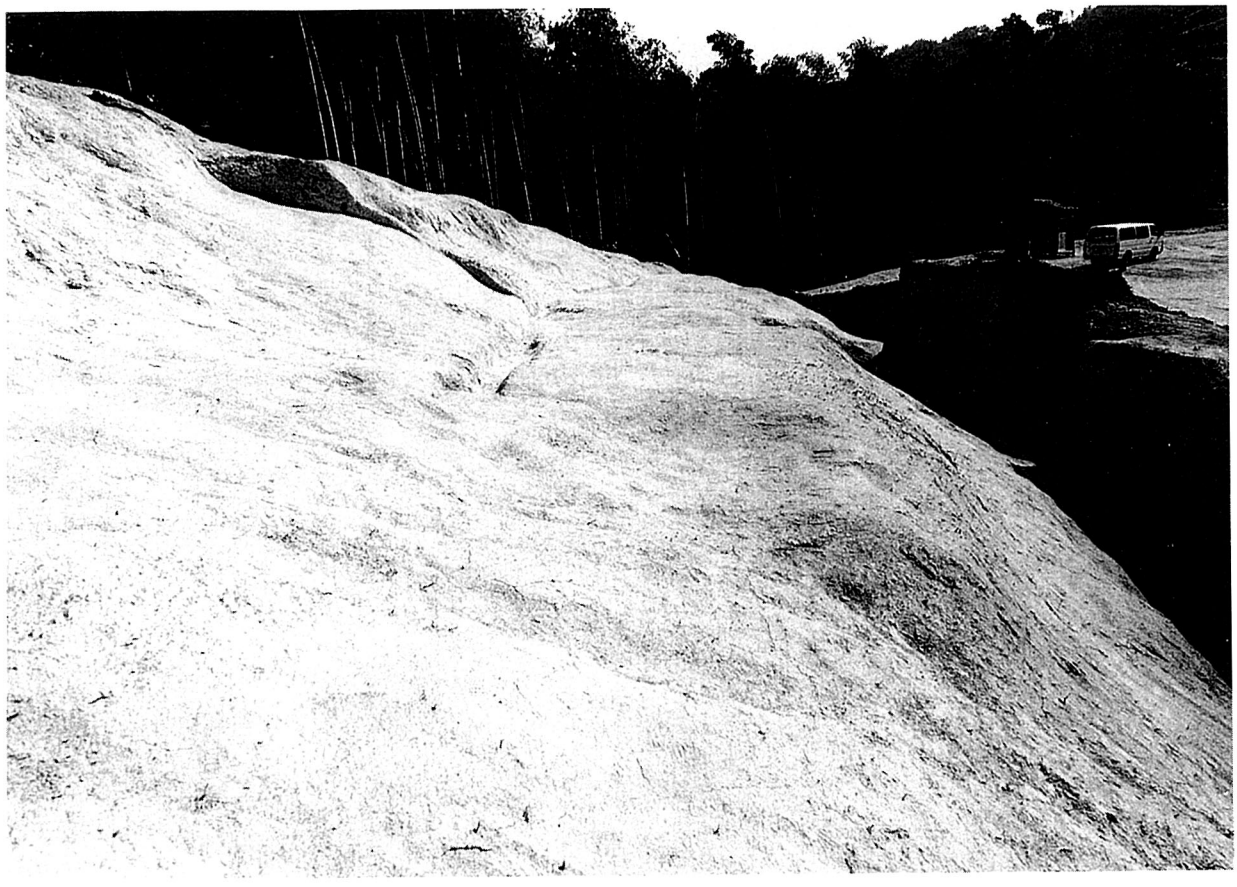


b．第1・2号掘立柱建物跡

図版 6



a．第１号テラス状遺構



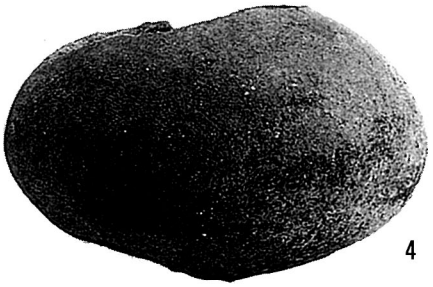
b．第２号テラス状遺構



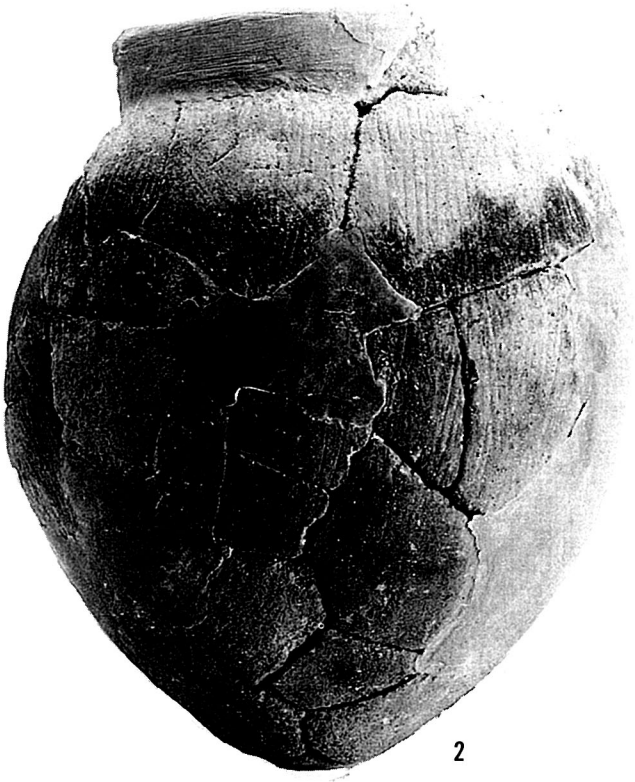
1



5



4



2



7



9



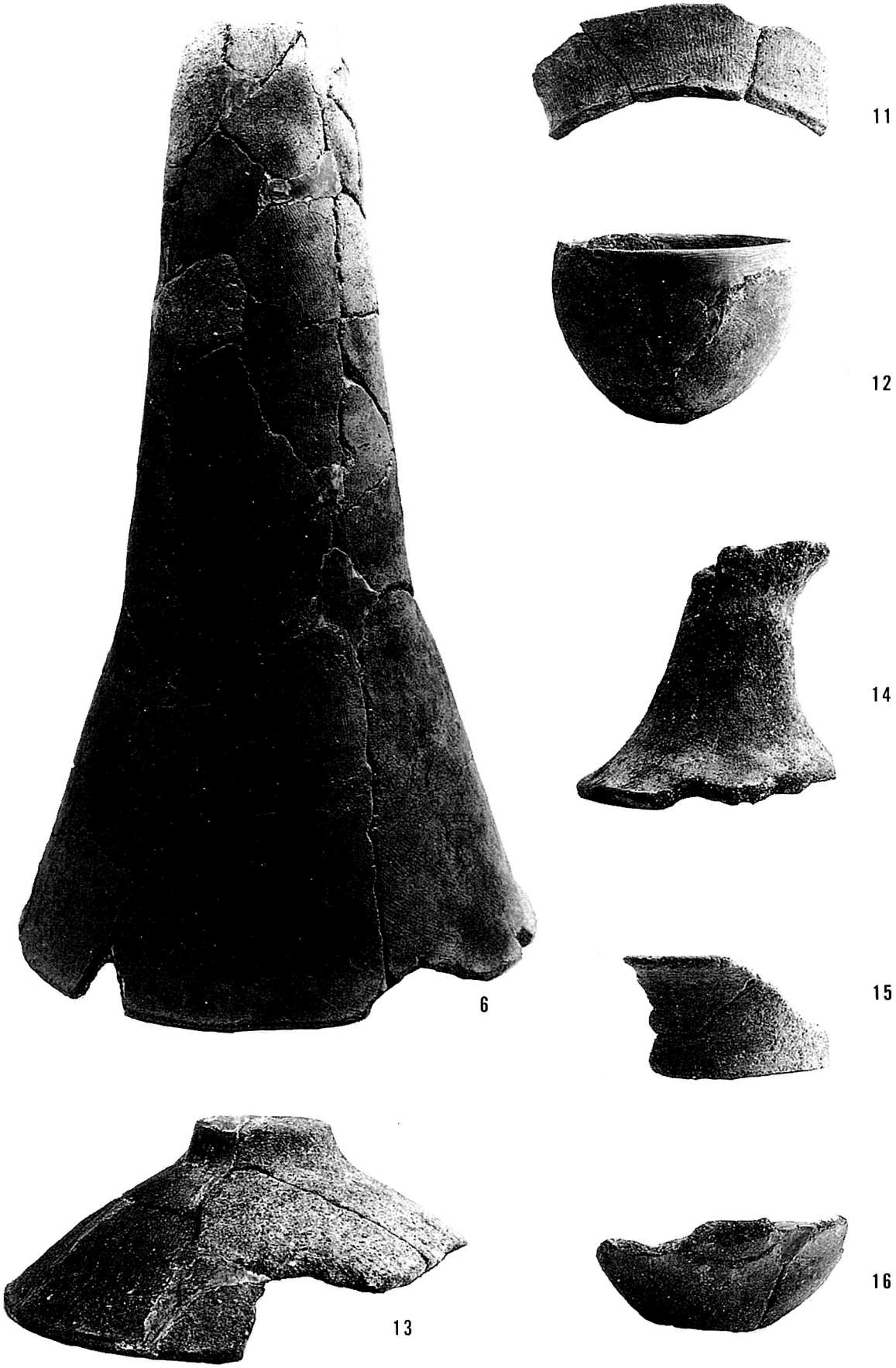
3



8

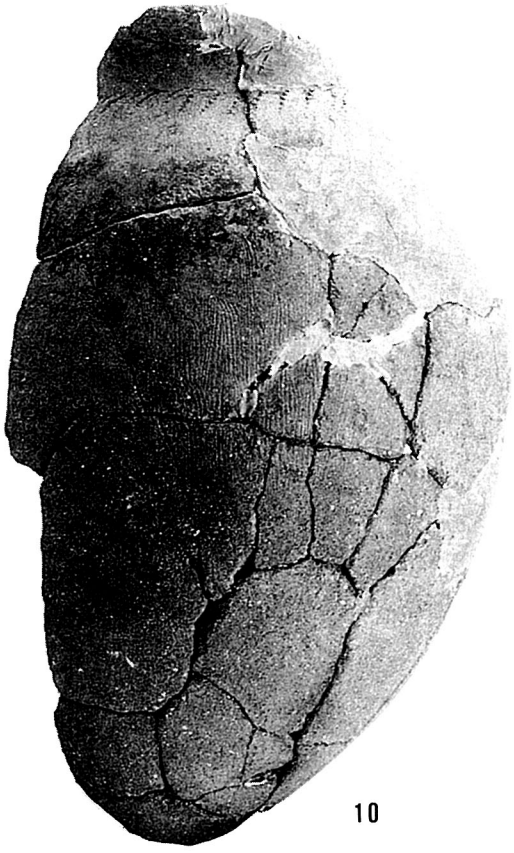
黒谷遺跡出土遺物(1)

図版８

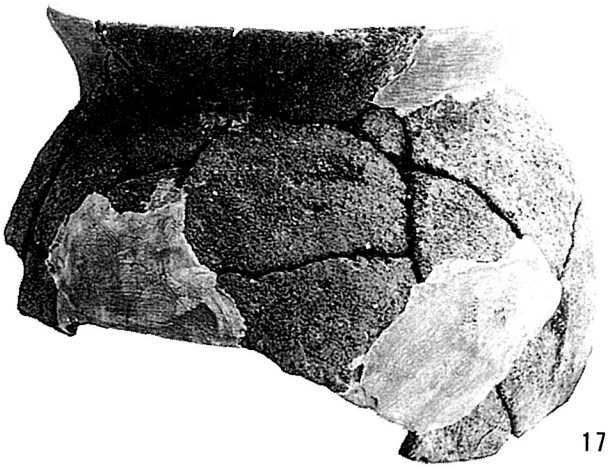


（６はＳ＝１：６）

黒谷遺跡出土遺物(2)



10



17

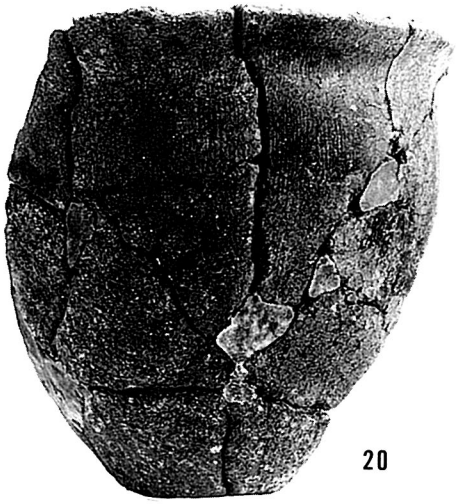


18



19

図版10



20



23



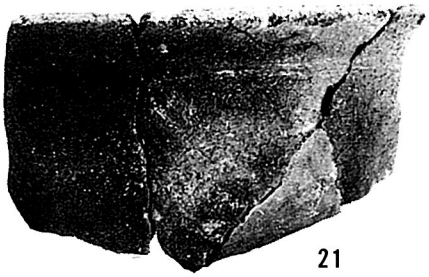
24



25



26



21



22



29



27



28

(23～29はＳ＝１：１)

黒谷遺跡出土遺物(4)

㈶広島市歴史科学教育事業団調査報告書　第17集

広島市佐伯区五日市町所在

黒谷遺跡発掘調査報告

１９９５年３月

編集
発行　財団法人　広島市歴史科学教育事業団
広島市中区国泰寺町一丁目４番15号
ＴＥＬ（082）248－0427

印刷　㈲　清　弘　社
広島市中区本川町二丁目３－８